

---

# シュワッチ！ Shuwacchi！ -

坂東秀幸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シュワッチ！                      S h u w a c c h i ! -

### 【Nコード】

N 5 3 8 3 0

### 【作者名】

坂東秀幸

### 【あらすじ】

「命の重さって何グラム？」「どこまでが友達で、どこからが親友？」「夢の価値っていくら？」そんな疑問を常に抱えていたあの頃…

「二人で武道館ライブ！」無謀な夢を掲げた、ド音痴の少年ジンと、『神の声』を持つ少年ハジメ。

そして、学園始まって以来の秀才児。120キロの肥満児。笑顔を

失い、夢を諦めた少女。運命はそれぞれの物語を引き合わせる…

実話を元に構成された、笑いあり、涙ありの懐かしくも新しい青春小説。

2011/03/17 第16話追加しました。

登場人物 2011 / 03 / 09 更新（前書き）

登場人物は随時、更新されていきます。

## 登場人物 2011 / 03 / 09 更新

主人公：早河 陣 ハヤカワ ジン

あだ名：ジン 年齢18歳 厚南高校三年生

性格は、大雑把だがいつもビシツと筋の通った事を言う。しつこくないリーダーシップがみんなから愛される存在。小川一とサンライズを結成。唄は昔は音痴だったが、情熱と気持ちを強く訴えることで何とか唄として「聴ける」ところまできている。

18年間彼女なしで童貞。カバンにイノセントマン人形をぶら下げている。

人物：小川 一 オガワ ハジメ

あだ名：ハジメ 年齢18歳 厚南高校三年生 「神の声」を持つ少年。理由は2つ。ひとつは単に唄がうまいから。もうひとつは、ハジメ一の唄声には幽霊を引き寄せる力があるから。小柄ながらも、短髪でとても爽やかにさが特徴。

人物：橘 鶯 タチバナツグミ

あだ名：タチバナ 年齢18歳 厚南高校三年生 スラッと高い身長で、この学校始まって以来の秀才と言われ、人望も厚い。黒縁眼鏡が特徴。

人物：中村 要 ナカムラ カナメ

あだ名：モツサ 年齢18歳 厚南高校三年生 120キロの巨体。

ヒロイン：坂口 美空 サカグチ ミソラ

あだ名：ミソラ

年齢18歳 歌手を夢見る少女。

人物：早河 怜<sup>ハヤカワ レイ</sup>

あだ名：レイ

年齢34歳 ジンの母親でもあり、厚南高校の保健室の先生でもある。タチバナに好意を抱かれている。色気があり、何の香水が分からないがいい匂いがして、クルクルに巻かれたピンクブラウンの髪が特徴。

人物：松園 健二<sup>マツゾノ ケンジ</sup>

あだ名：マスター

年齢45歳 マスターズカフェのオーナー 謎の多い人物。

人物：野田 清道<sup>ノダ キヨミチ</sup>

あだ名：なし

年齢40歳 ジン達の担任教師 人相は、ブルーの2本線のフルジヤージに、オッサンスリップ&靴下、ウェットオールバック。『地獄棒<sup>ゴクボウ</sup>』と自ら名付けた竹の中に、鉄の棒を埋め込ませたおぞましい武器を好んで持ち歩く。『歩く凶器』と言われ全生徒から恐れられている。

人物：近藤<sup>コンドウ</sup>

あだ名：総長

年齢：18歳 トップブラザーという山口県では一番有名な暴走族の総長。身長は高く、右頬に縫い傷があり、獣のような冷酷な目の特徴。

人物：河嶋<sup>カワシマ</sup>

あだ名：なし

年齢：16歳 トップブラザーという山口県では一番有名な暴走族の一人。総長の近藤<sup>コンドウ</sup>の右腕。トップブラザーの頭脳とも言われている。暴走族でありながら、どこか気品を感じさせる立ち振る舞い。

スキンヘッドが特徴。

人物：橋場<sup>ハシバ</sup>

あだ名：背の高いおっさん

年齢45歳 マスターがヤクザだった頃の舎弟。今はマスターズカフェを切り盛りしている。

## 第01話 ソウガじいちゃん（前書き）

夢は武道館ライブ！ド音痴の少年ジンと神の声を持つ少年ハジメ。

そして、夢を諦めた少女、学園始まって以来の秀才児、120キロの肥満児。イタズラな運命はそれぞれの物語を引き合わせる…

作品の舞台が山口県のため、台詞に一部読みづらい文章が含まれています。ご了承ください。



## 第01話 ソウガじいちゃん

茜空の下を、黒のランドセルを背負った三つの影が、ひとつの場所を目掛けて走っていた。

「カシャカシャ」と音がするのは、今日の授業だった算数、理科、社会の教科書とノートが中で踊っているからだ。

季節は、秋から冬に変わろうというのに、三人は薄手のシャツと半ズボン姿だった。

市役所の手前にかかる橋沿いにある建物<sup>ソレ</sup>は、8階建てのビルと10階建てのビルに挟まれた場所に凜と建っていた。

38年前に建てられた建物<sup>ソレ</sup>は、全身をコンクリートで覆われ、甲子園を思わせるような植物の蔓が生い茂っている。両サイドには西洋風の出窓があり、二階のちょうど真ん中あたりには、次に台風が来ると飛んで行ってしまいそうな看板が立て掛けてある。

そこには『K I N G<sup>キング</sup>』とだけ書かれてある。

「カラン、カラン」と古臭い鈴が鳴り、高学年であろう三人の小学生は建物<sup>ソレ</sup>の中に「カシャカシャ」と音をたてながら入って行った。

一階は一面フロアリングで、観葉植物の溜まり場になっていた。扉を入って左手にはバーカウンターがあり、世界各国から集めた酒が、所狭しと棚に飾られていた。右手には低いステージがあり、その両側にはアンプと数々の機材が置いてある。

三人はその中央にある螺旋階段を軽快に上り、いくつもの絵画が飾られた廊下を走り、一番奥にある部屋に繋がるドアの前で立ち止

まった。

そして、ゆつくりとドアノブを回して部屋の中に入る。

中に入った三人に最初に飛び込んできたのは、入れたてのコーヒ  
ーの匂いと、グラグラと揺れる椅子に座る白髪の老人の後姿だった。

「ソウガじいちゃん。」

三人組の一人で、ハリボテのような髪型の少年が、空気の読めな  
い大きな声で叫んだ。

その老人は、入れたてのコーヒを飲む寸前で止め、カップをテー  
ブルの上に置いた。「コンッ」とカップの音がすると同時に、その  
老人はしゃべり出す。

「坊主三人が来たって事は、もう4時過ぎかいな…。」

そう言うのと、老人は壁に掛けてある時計を見ながら、三人組がい  
る扉の近くにある四人掛けの黒のソファに腰掛けた。

動き出した老人を確認した三人は、その老人より先に向かい側に置  
いてある黒のソファに、ランドセルも置かず座り込んだ。

「じいちゃん、早く昨日の続き話してえや。」

坊っちゃん刈りの少年は、老人が座って葉巻に火をつける作業を  
見て待ちきれずにしゃべりだした。

「まあ、そんなに焦るないや。え〜と、昨日はどこまで話したかい  
の〜。」

「じいちゃんの中学校時代までは聞いたよ〜。明日は高校生時代か

ら話すとか言いよったよ。」

ハリボテ頭の少年が、「しっかりしてよ」と言わんばかりの口調で老人に話した。

老人も、ようやく思い出したのか「あゝ、そうやったのゝ。」と言いながら、葉巻の煙を口に含み吐き出しながらしゃべり始めた…

## 第02話 三年目の春

市内でも有名な馬鹿男子高校にギリギリで入学した俺は、当然クラス内に留まらず、全校でトップクラスの馬鹿生徒だった。

学ランの第一ボタンは、入学して2週間で2年の先輩にタイムンを吹っかけられた時に取れた。喧嘩は好きじゃない。でも、喧嘩を売られて買わない消費者オトコでもない。

もちろん、その先輩はぶちのめした。そのせいで、その日の放課後に体育館の裏に呼ばれ、顔の形が変わるかと思うくらいボコボコにされた。13対1じゃあ無理もない。

髪がボサボサなのは、セツトする暇があるなら寝ていたい年頃だからで、

カバンにぶら下げてる人形は、幼稚園から俺のヒーロー『イノセントマン』だ。

話すと、長くなるんで追々話す。上靴は常足のかかとを折り曲げて履いてるせいか、常に靴下のかかところが汚れていてる。

そして、18年間彼女なしで童貞だ…

俺の朝は、いつも一人だ。それは、8時30分に鳴る始業のチャイムを、学校の校門の前で聞くことが多いからだ。要するに遅刻魔だ。

今朝もチャイムを校門の前で聞き、コンクリートの廊下を歩き、教室の後ろのドアをこそつと開いた。出欠を取る担任教師が出席番号21番の橋本哲也ハシモト テツヤの名を呼び、橋本が「はいっ。」と呟く足元を

4足歩行で通過していると、

「ハヤカワ ジン  
早河陣！」

「はい、先生！今日も天気いいですね。」

機嫌をとろうとしたが無理だった。

「はい、そのままお前の定位置の廊下に立つとけ！」

その言葉と同時に、担任は持っていた出席簿で俺の頭を叩いた。

「はっはっはあ。」

ここでいつも笑いが起きる。

担任は、この学校で一番怖いと言われている『ノダ キヨミチ  
野田清道』この人は  
数々の伝説を残した。

身なりは…いや、人相は、ブルーの2本線のフルジャージに、オツ  
サンスリップ&靴下、ウェットオールバックとまでいえば顔は自ず  
と想像できるでしょう。

『ジゴクボウ  
地獄棒』と自ら名付けた竹の中に、鉄の棒を埋め込ませたおぞま  
しい武器を好んで持ち歩く。『歩く凶器』と言われ全生徒から恐れ  
られていた。

俺も幾度となく彼の餌食になった。一番ひどかったのは、雑巾が所  
定の場所に掛けられていなかっただけで、その時の風紀委員だった  
俺が『ジゴクボウ  
地獄棒』で3発もケツバツを食らった。そのときは、ケツ  
がなくなっただけだった。

二時間目の終わり、ようやく開放された俺に近づく2人組がいた。

「これはこれは、遅刻の常習犯の陣君<sup>ジンケン</sup>じゃないですかあ。」

最初にしゃべりかけてきたのは『タチバナ』だ。彼は、スラッと高い身長で、この学校始まって以来の秀才と言われ、人望も厚い。黒縁眼鏡にはこだわりがあるらしく、同じような眼鏡を一週間分持つくらいの徹底振りだ。

「今日の昼飯、何食う？」

呑気にしゃべる巨体こと『モツサ』は、120キロの体重以外は特に紹介することも無い。

昼休み、何を食うか迷って購買部の前を通ると、黒い集団が群がっていた。これもいつものことだ。野球部の先輩のパシリで、人気ナンバーワンの焼きそばパンを死に物狂いで買いに来た坊主頭の一年生。目が血走ってる。

無理もない、買い損ねたりしたらどやされるに決まっている。そんな中、見覚えのある後姿を目にした。

モツサだ…

120キロの巨体を思う存分振り回しているモツサは、まだ入学したてで体のできてない一年を、何の遠慮もなくふっ飛ばし、5、6個焼きそばパンを買い占めた。

これが世に言う、人情の欠片もないやつだ。何度かモツサと目が合った様に思えたが、その血走った目はヒグマか猪にしか見えなかつ

た。

結局、購買部を諦めた俺は、屋上で寝転んで空腹をしのいでいた。春の風の匂いと日差しが心地よくてしばらく一人で沈黙を楽しんだ。

もう、高校生活最後の春になってた。

「どうした、若者。」

と、黒縁眼鏡のタチバナが横に座り込んできた。

「何か、おもしろいことねえかな。」

その言葉に対して、「青春ドラマみたいな台詞やの。」とタチバナらしい言葉が帰ってきた。空に向けていた目をタチバナに向けて見ると、タチバナも俺のほうを見た。ちょっと見つめ合ってお互い気持ち悪くなって笑ってしまった。

「見つめんなーや。」

「オーレ？お前が見つめるけえやろうが！」

オーレ？？？何それ…。一瞬気持ち悪いと思ったが、出合った頃からタチバナは、自分の事を呼ぶのに「オーレ」と言っていた。昔はいっしょにいた友達みんな大爆笑だったが、笑いがひと段落したくらいに間違えて言ったのかわざと言ったのかを確かめると、いつもタチバナは自信満々に「わざとだ。」と言い放った。

興味なかったんであまり覚えてないが、タチバナが猛烈にファンだと言う何とかバンドのボーカルの真似をしたと言っていた事を思い

出したので、今は笑うのを止めた。

「俺等ってさあ、いつから仲良くなったっけ？」

そんな、何気ない発言に夕チバナは真面目に話し出した…



### 第03話 黒縁眼鏡と恋と友

幼少の頃から、誰に言われたのでもなく進んで学問の道を選んだ。別に母親が中学校の先生で、父親は外科医をやっているから親を見習って…とかじゃない。人付き合いが面倒臭いだけだった。だって、数字や文字は絶対であり、裏切らない。

要するに、自分の考えうるもの以外は認めたくない。

そんな、ひねくれ者なオーレに友達なんてできるわけもなく、高校に入ってソイツに出会うまで友達なんていらねえなんて開き直っていた。

その開き直りは進路にも出ていた。県内一番の高校を受験すると、両親も担任もクラスメイトでさえ思っていたらしく、オーレが今の馬鹿高校を受けると言ったとき誰もが猛反対だった。

父親に関しては「そんな高校に進むくらいなら高校なんて行くな！」なんて言うけど、オーレがただ反抗期だけで、こんな馬鹿学校に入りたいと思うわけがない。

中三の夏、もうほとんどの生徒が志望校を決め、それに向けて勉強をしている頃。オーレは親に決められた名門校に入る事が当然だと思い、その志望校にあえて推薦という選択は選ばず、成績トップ合格を狙っていた。

理由は簡単、かつこいいから…

その日も、愛用している黒縁眼鏡の金曜日専用（もちろん、一週間分ある。）をかけるなり、参考書を片手に塾へ行くための国道沿いの整備された歩道を歩いていた。

コンビ二を通り過ぎてすぐの信号で止まり青になるのを待っていた。すると、オーレの肩に「バコッ」と何かが当たった。

こんな田舎の信号待ちでは有り得ない出来事に、油断していたオーレは思わずヨロけて「ドンッ」と音を立ててシリモチをついてしまった。

「きゃっ。」

声のトーンで女性だと気付いた。

その女性は、黒のミユールに黒の網タイツ、グレーのスカートに、白のシャツでかなり色気があった。何の香水か分からないが嗅いだことのないようないい匂いがした。そのピンクブラウンでクルクルに巻かれた髪は今も忘れない。

よそ見をしていたのはオーレの方なのにその女性は、

「ごめんなさい、怪我してない？」

と、言いながら手を差し出してきた。

オーレは、さっきまで頭の中で計算してた二等辺三角形の面積と式がふっ飛んでしまった。

そう…オーレは、この女性に一目惚れしてしまった…

一番嫌いな恋愛小説でも描かれないくらいベタ過ぎる出会いに動揺を隠せないオーレは、右手を伸ばしたままの「どうかした？」という女性の言葉で我に戻る。

彼女は、この先の高校の保健室に勤めているという。彼女は急いでいるらしく、何かあったら高校<sup>ソコ</sup>まで来てとだけ言つとその場を後にした。

その後姿が見えなくなるまでずっと激しく胸打つ鼓動を抑えながら見つめていた。

あの事件があつた後、ずっと彼女のことが頭から離れない。オーレはもちろん恋愛はした事がない。小学校の時は国語の教科書の「赤い実はじけた」とかいう物語の内容の意味なんて分からなかったし、理解なんてしようとしてもしなかったが、今なら何となくわかる気がする。そんな事をひたすら考えたが、理屈じゃあ解決できそうもない。

かといって、何て言つて会いに行けばいい？

（すいません、やっぱ、あん時痛めた腰がうずいてきて…）

（やっぱり、あん時に焦がした胸の傷が癒えなくて…）

…不自然すぎる。ああ、こんなんじゃあ勉強に手がかからない。

何ヶ月もそんなことを考え抜いた結果、ある結論にたどり着いた。そうだ、彼女が勤めてる学校に入学すればいい、そうすれば頭が痛いですとか適当な理由をつけて保健室に行けばいいんだから。

そうになると、次にやらないといけないのは…両親と担任の説得かあ。

あの馬鹿高校に入るなんて目を閉じてでも合格はできるが、間違いなく反対される。特に、父親に関しては無理に近い。今まで私立の名門校に通わせてもらっているオーレを、将来は間違いなく医者にさせようとしてるだろうから。

少し罪悪感に襲われた。

そんな両親を押し切ってこんな馬鹿高校に入学した事は、今となつては後悔はしてない。異常なほどに意志の固いオーレを見るのは初めてらしく、父親は「勝手にしろ」と捨て台詞を残したまま、ほとんど口をきいてない。

母親は「あなたが自分で選んだのなら私は応援するよ」と相変わらずオーレの気持ちを分かってくれた。

入学しても相変わらず友達なんてできるわけもなく、どんな理由で保健室に行けばいいのかもわからず、クラスでも浮いていたオーレは、毎日授業を除いて休み時間や放課後は体育館の裏で小説を読むことに時間を費やした。

やはり、県内でもっとも馬鹿な学校だけあって生徒も馬鹿そんな奴で溢れかえっている。

その日もくだらない授業も終わり、いつものように生徒たちが下校する時間帯をさけるために体育館裏へ向かっていた。

別に一緒に帰る奴もいないし、群れるのが大嫌いだったオーレは、生徒たちが下校した時間を見計らって帰るようにしていた。ジャリ道を抜けて、体育館の裏まで行き、壁にもたれながらの読書がいつもの日課だ。

しかし、その壁側に寝そべってる奴を見つけた。あそこはオーレの特等席だ。ちょっとイラッときたが、どうもそいつの様子がおかしいので近づいてみると、そいつは顔のいたるところから血が出ていて、目は妖怪みたいに膨れ上がっていた。おそらく集団に暴行されたのだろう。そいつは、人の気配に気付いたのか妖怪のような目を開くなり、

「そんなに、見つめんなつつの。」

と、口の中の血を吐き出しながらしゃべりだした。そして、変な沈黙が続いた。

「ぶっ！がっはっはっは！」

思わず吹いてしまい、二人で笑い転げてしまった。あんなに笑ったのは生まれて初めてで、腹がねじれるとはこのことを言うんだと知った。

よく分からないが、ソイツと意気投合してしまっている話した。ほんと、くだらなくて、低レベルな会話だった。でも、今まで接してきた奴と全然違うタイプの人間で、ソイツのくだらなくてクソおもしろい話を不思議と聞き入ってしまう自分がいた。

名前を「早河陣」<sup>ハヤカワジン</sup>と名乗った早河陣<sup>ソイツ</sup>をとにかく治療しなければと思ひ、肩を持ち上げて彼女の待つ保健室へと連れて行った。

この学校に入学して2週間、こんな形で彼女に会えるなんて思ってもみなかった。1階の校舎のコンクリートの廊下を通り、標識に「保健室」と書いてある引き戸の前に立ったとたん、急に足がすくんでしまった。

…何度、この扉を開けようとして止めたことか。

「って、あっさり開けちゃうんだ。」

と、思ってる事がつい声に出てしまったオーレに、何のためらい

もなく早河陣は「当たり前やん。」と言いながら「ガラガラ」と扉を開けて中に入ってしまった。

オーレも、破裂して内臓が飛び出るんじゃないかと思うくらいドキドキしている胸を押さえながら、その禁断の部屋へ一歩また一歩と足を踏み入れた。

はじめに飛び込んできたのは忘れもしない、あの時の香水の匂いだ。そして、ココが男子校だと言うことを忘れてしまうくらいに純白に統一された部屋はまさに絵に描いたような保健室って感じで…って、保健室か…。

とにかく、初めて入ると言うより「おかえり」って感じた。

「おう、怜<sup>レイ</sup>！ちょっと治療してえや！」

ん？呼び捨て？？？

「あんた、また喧嘩してきたん？しかも、ボコボコやん！」

ん？親しいの？？

「うつせえ！」

ん？暴言？

幾つかおかしい点もあるがまあいい、ひとまず彼女と再会できた。今日も白のシャツに黒のスカートで、おまけに羽織っている白衣がまたよく似合う。

「あ、あなたは…」

お！オーレにようやく気付いた。オーレは、自分の頭の先からつま先まで電流が走る音を聞いた。

「ん〜…」

無理もないよな、あの衝撃的な出会いはもう半年以上も前だし、たかが数分の出来事だし。でも、彼女は脳裏に何かが過ぎった様な顔を浮かべながらしゃべりだした。

「この生徒やる？？」

「いや、見りゃわかるでしょ！」

早川陣ソイツは、「痛いっ、痛い！」と叫びながら彼女から治療をしてもらっていた。

「だらしねえな、そんな子に育てた覚えはないよ！」

は？…「そんな子？」冗談うまいな…。

でも、普通冗談を言うときはもつと笑って言うやろ？まさかね…。まさか、こんな美人がこんな下品な猿人を生む訳がない。

「そんな子って、先生！面白い冗談ですね。ははは。」

と、彼女の冗談を引き立たせるために入れたフォローに下品な猿人ハヤカが食いついた。

「あ、言うの忘れちゃったけど、こいつ一応さあ俺の母親ね。」

「は？？」

「一応とは何よ！馬鹿息子！！」

[illegible]

真つつつつ白になった……。

「そんなに驚かんでも……」

ソイツ  
早河陣は、オーレにそんな事を言った気がするがよく聞いてない。

「え、でも先生の年齢を予想すると、陣君ジンくんの年齢と合わないような気がするんですけど。」

「ああ、あたしは陣ジンを16で産んだからね！こう見えてもう、34よ。」

「は、はあ……」

オーレはそう返すのでやっとなった。

その帰り、早河陣ソイツと別れて消防署の裏のあぜ道を一人で歩いていると、何か笑けてきた。

何してんだろっ…

親の反対を押し切つてまで入った高校の保健室に勤務する初めて恋した人が、初めて友達になれそうかなあと思えるやつの母親なんて……。一気に肩の力が抜けてしまい「ドンッ」とまたシリモチをつい



てしまった。

「一生の友達になれそうだな」陣<sup>ジン</sup>。

こぼれた涙は、甘酸っぱい初恋の味とドロドロの友情の味がした  
とでも言っておこう。

## 第04話 空腹の喫茶店

空腹のまま授業も終わり、モッサとタチバナと俺は消防署の裏のあぜ道を抜けて、住宅街の中にある、「マスターズカフェ」と看板の立った店へ足を運んだ。

「カラン、カラン」と店内に鈴の音がこだますると、奥の方からスキンヘッドでサングラス、袖から龍の入れ墨が見え隠れするTシャツを着たガツシリとした中年男が出てきた。

一応、白いエプロンをしているので初めて来る客でも店員だとわかるだろう。

店内は一面フローリングで、観葉植物がうつとうしくない程度に飾られていた。そんなに広くないが何故かここに来ると癒される。

中年男は、俺たちだと分かった瞬間に肩の力を抜いてしゃべりだした。

「お帰りなさいませご主人様ってか。」

「今のところ、マスターは世界一その台詞が似合わんね。」

マスターの発言に冷静にタチバナが答えた。

「うつせえ、未成年。」と、毒を吐きながらいつもののでいいのかと聞いてきたので、代表して俺が「うん。」とだけ言うが一番奥の窓際の席に腰掛けた。

そして、タチバナはカバンから厚い本を取り出して、お決まりの読書を始めた。

マスターとは俺が小さい頃からの仲で、父親を知らない俺にとっては血の繋がらない父親みたいな存在だった。よく<sup>レイ</sup>怜と喧嘩して家出した時とかは家に泊めてくれていた。

<sup>レイ</sup>怜とマスターの奥さんは小学校時代からの親友だった。でも、どう言う訳か6年位前にマスターは奥さんと離婚して今は一人で店をやってる。<sup>レイ</sup>怜もそれ以来、気まずいらしく店には顔を出さない。

マスターは、オレンジジュースの入った業務用の紙パックを3つのコップに注ぎ、顔に似合わず手作りしているショートケーキ1個と、ジュースをおぼんに乗せ、俺たちのいる窓際のいつもの席にヤンキー歩きで来た。

「ああ、腹減った〜！俺朝から何も食ってないんよ〜。」

荒々しくテーブルの上にジュースの入ったコップを置くマスターは、わざとらしくしゃべる俺に反応して答えた。

「出世払いのくせに文句言っとなっ！」

「うつせえ、俺が大物になったら〜！」

「店ごと買っちゃる！やる???1億万回聞いたわ！」

俺の名台詞までスキンヘッドに取られた。

悔しがる俺をよそ目に、満面の笑みでモッサは目の前のショートケーキを完食するのに精一杯だった。

「ああ、相変わらずモッサは旨そうに食うの〜！」

財布の中身と相談の結果。よだれを垂らしながらテーブルに顎をのせて、モツサを見てそう発言するしかなかった。

「そういえばさあ、モツサ！どうなん、コンビニの女の子！声かけてみた??」

ケーキを食べるのを中断したモツサは、顔を一度見てすぐに恥ずかしそうに目をそらし、小さく「いいや、まだ。」と言った。

「おい、何年片思いしちよるんか！」

「毎日来て、立ち読みするだけのお客やけえ嫌がられちよるやろうね！」

聖書並みの分厚い本を読んでいたはずのタチバナが、急に会話に入ってきてまた、読書に戻った。

「話、聞いちよったんや…。確かにタチバナの言うことは正しいな…」

「ちよつとお、応援する気あるん？」

不安そうにモツサが口にする。

「ある、あるっちゃ！応援するつつたのも俺からやし…」

とは言ったものの、モツサの性格からするとジロジロその子を見てるから、なおさら気持ち悪がられてるはず…。  
そんなことを考えだすと、余計に不安になってくる。

「当たって碎けるじゃねえか？」

グラスを磨いていたマスターがしゃべりだした。

「おお！マスターいい所に入ってきた！」

と、俺が囃し立てる。

「今となっちゃあ失敗談になっちまうけど、前の奥さんに告白する  
ときなんて彼女の働いてる職場に2年間も通いつめてバシッと言っ  
てやったぞ！！」

「脅迫やん！んで、どうやったん？」

と、俺。

「フラられた…。」

「駄目じゃん！！！！」

と、モッサ。

「でも、23回目にOKが出たっちゃ！！」

「やっぱ、脅迫やん！！」

マスターの意見は当てにならなかったで却下。ため息をつくモ  
ッサを励まそうと恋愛経験のない俺は必死に考えるがやっぱり出な  
かった。

「ちょっと原始的やけど、ラブレターはどうかあ？」

「さっすがタチバナ！それで行こう！！」

と、タチバナの気の利いた発言に救われた俺は声を高らかにしゃべった。

手紙<sup>ッレ</sup>は、試行錯誤しながらも1時間ほどで書き上げた。3年も思いを募らせばそんなもんなんだろうか…。

「できたやん！早速、渡しに行こうぜ！」

と、俺。

「でも、彼女。仕事終わるの9時やもん…。」

と、モツサ。

「あと、3時間はあるな…。」

腕時計を見ながらマスターが言う。

「ああ、駄目だよモツサ君。マスターズカフェは閉店が8時までなの…。」

と、俺。

「嫌味にしか聞こえんな。しゃーないな。9時まで営業延長！」

「ああ、ありがとうございます！マスター！！！」

モッサは、男気のあるその発言に大喜びでマスターに近づき、手を握り締めた。言うまでもなく、マスターは嫌そうだ。

時間を潰すのが大の苦手な俺は、空腹に襲われながらいろいろくだらない話をした。

それに乗っかって、難問ブックを読んでいたタチバナが、おもむろにしゃべりだす。

「そう言えば、モッサって何でモッサなん？名前は「ナカムラ中村 カナメ要」やる？一文字もかぶってないやん！！！」

言われてみればそうだ。

モッサは口数が少ないせいかなり自分の事を話したからない。

タチバナと俺は、興味津々な瞳でモッサを見てみると、さっきまで放置していたショートケーキを食べ終えて、フォークを皿の上に置きながら重たい口を開いた。

第04話 空腹の喫茶店（後書き）



## 第05話 醜い鶏の子

一般的な家庭で生まれ、みんなと同じ空気を吸い、みんなと同じように生きてきたつもりだった。

しかし小学6年で85キロにまで膨れ上がり、中学に入ってから100キロ目前なワイの体系や内気な性格を見て、面白半分にクラスメイトの連中はイジメを繰り返した。最初の方はまだ「おデブ」「カロリー」とか言われるだけだったが、ワイはただ笑ってやり過ごしていた。

でも、無反応のワイを見てイライラしたのかイジメはだんだんエスカレートして暴力や嫌がらせになってきた。その頃から、見た目がもつさりとしているからと言って、リーダー格の近藤が「モサ」と呼び始めた。

一番ひどい嫌がらせは、授業中にとりの女子が筆箱を落としたので拾ってあげると。

「いやゝ！もう、この筆箱使えんわゝねえ！！」

と、泣き出してしまったとこかな。

あの時は、家に帰ってから目が腫れるくらい泣いた。

そんな生活でもワイは、なんとか耐える事ができた。

それは、友という名の大きな救いのお陰だった。

ワイに比べたら貧弱な体だが、とても心の優しいのぼる君はいつもそばにいてくれた。どんなにワイが陰険なイジメに合おうと、のぼる君だけは、一人ぼっちのワイと給食と食べてくれたり「いっしょ

に帰ろう」と言ってくれる。

休みの日は、図書館に行った。のぼる君は頭がいいので難しそうな本を探しては読んでた。ワイに、そんな難しい本は読めるわけもなく、雑誌や絵本を読んで時間を潰した。そんな休日の過ごし方も楽しかった。

でも、恐れていた日は突然やってきた。

朝ごはんを食べ過ぎたワイは、ちよつと膨れ上がったお腹をさすりながら何ら変わらない通学路を歩き、登校した。

そして、あんまり目立たないように席に着いて辺りを見回すと異変に気付いた。

いつもなら、席に着くなり近藤たち<sup>コンドウ</sup>がやってきて、ホームルームが始まるまでイジられて一日が始まる。近藤たちだけじゃない。

よく考えたら、他のクラスメイト達と一度も目すら合っていない気がする。

それは、一時間目、二時間目が終わることに皮肉にも信憑性がわいてきた。

そんな状況なのに、心のどこかでは冷静でいられた。

それは、のぼる君が昼休みになつたら「いっしょにご飯食べよう」と言ってくれると信じていたから。

しかし、ワイは初めて給食を一人で食べた…。

初めて孤独と言うものを知った。

のぼる君は結局最後までワイを避けて一日を過ごした。みんなに無

視されるのはまだいい、辛いのはのぼる君に無視されたことだった。

その日は、一人で帰った。

家に帰るなり、そのまま二階にある自分の部屋に入った。ベッドの中にうずくまり、何時間か声を殺して泣いた。途中で、母さんが、

「要<sup>カナメ</sup>、ご飯よー！」

と、ドアを叩いたが起き上がれる状態じゃなかった。

きつと、のぼる君は何か嫌な事があって、今日は誰とも話したくなかったんだと言い聞かせる事しかなかった。それでしか、現実の世界に自分を存在させる方法はなかった。明日になればみんな今まで通りになつてゐるはず…。

次の日も、次の日もワイは一人ぼっちだった。のぼる君は休み時間や帰りは、近藤たちと一緒にだった。のぼる君に声をかける勇気もなく、ただ「今の状況に慣れよう」と自分に言い聞かせながら、孤独な日々を過ごした。

何も抵抗しないワイに対して、近藤<sup>「インドウ」</sup>たちはむきになり、クラス全員を巻き込んだ仕打ちは、卒業目前であろうと関係なかった。

前日の雪が残るいつもの帰り道を、ワイは今日も一人で帰っていた。

もう、誰からも相手されない事は心のどこかで慣れてしまっていた。

そんなワイの目の前に、懐かしい後姿が飛び込んできた。

のぼる君だ…

のぼる君はワイと目を合わせるなり、その場を駆け足で逃げ去ろうとした。

「のぼる君！！」

自分でもこんなに大きな声が出たことに驚いた。その声をきくなり、のぼる君はビタツと立ち止まった。

「何でなん？」

その言葉にすべてを込めた。

別に、仕返しをしたいとか、謝ってほしいとかではない。ただ、何であんなに優しくかったのぼる君がこんな酷いことをしたのかを知りたかっただけだった。

でも、「近藤<sup>コンドウ</sup>たちに脅されて仕方なくした」って心のどこかで言うてほしかった。

「要<sup>カナメ</sup>君を無視せんと、次は僕が標的にされるけえ…。もう、僕に話しかけんで！こんなところ近藤<sup>コンドウ</sup>君たちに見られたら仲間と思われる…。」

そう言い残して、のぼる君は走り去っていった。

こんな話を聞いた事がある。

鶏には弱い者いじめの習性があり、複数を小屋に閉じ込めるとリーダー的な鶏が出てくる。ソイツが、一羽をつつくなど攻撃すると、群れ全体がそれを真似する。

例え、いじめられた一羽が死んでしまっても、次の一羽を見つけて攻撃する。そんな負の連鎖は永遠と続くという。

どこか人間に似ている。

何てことはない、ただ今回がワイの番だっただけの話だ…

のぼる君の後ろ姿が見えなくなるのと同時に、心のどこかで救いを求めていたワイの希望は、全て打ち砕かれた…

そして、生きていく自信を失った…

ワイは、卒業式には出席せず、何とか受かった高校の入学式も欠席した。

ただ、何をするのでもなく、一日また一日と、無駄に過ぎて行つた。

高校に入って2週間が過ぎた頃、ワイはまだ生きていた…。正確には、死ぬ度胸すらなかった。

日が沈むのを見計らって、何を思ったか外に出ていた。久しぶりに見る町はどこか心地よかった。

ワイは、いつの間にか人と接するのが怖くなっていた。

人目を避けるように駅の近くを歩いていると、どこからか罵声が聞こえてきた。

初めは、酔っ払いが叫んでいるんだろうと思っていたが、酔っぱらうにはまだ早い時間だ。あまりにもおかしい声の主に、どうしても一目会ってみたくなくなった。

駅前まで行くと、声の主はストリートミュージシャンだということがわかった。ただ、ギターを持っていなかったらただ叫んでいるだけの残念な奴にしか見えない。

これが世に言う「音痴」なんだと知った…

近づいてよく見てみると、その音痴は顔のいたるところに絆創膏や包帯だらけで、目は妖怪みたいに膨れ上がっていた。おそらく集団に暴行されたのだろう。

……。

「ぶっ！がっはっはっは！」

押さえきれず体の奥底から、笑いが噴き出してきた。音痴には悪いが、この光景はどんなバラエティ番組やマンガよりも面白かった。

どうしたらこんなに下手に歌えるのだろうか？

どこから声が出ているのだろうか？

自分の耳にはどう聞こえているのだろうか？

何人に殴られたらこうなるのだろうか？

そんな事を考えれば考えるほどおかしくて仕方なかった。

あまりにも笑いすぎたもんだからさすがに音痴コエノヌシは怒りだし、ワイの顔を何発か殴り出した。

「痛いっ。」

「当たり前やろ。これが頭をなでるように見えるか？」

確かに見えない…

でも、人から殴られるのっていつぶりだろう…

ワイは、この時こそ生きているって感じた瞬間はない。

馬乗りになって音痴コエノヌシはワイを殴り続けた。そうしていると、どこからか同じ年くらいの男子が駆け寄ってきた。

「陣ジン！何しよんか！やめろ！」

男子は音痴コエノヌシの脇を持ち上げて止めてくれた。音痴コエノヌシは興奮で我を失っていたのだろう。

後から来た男子は、何とか音痴コエノヌシをなだめると、ワイの方に近寄ってきた。小柄ながらも、短髪でとても爽やかに見えた。どうやら、ワイに謝罪の言葉を述べに来たのだろう。

「陣ジンの唄を馬鹿にしてええのは、僕だけじゃ！」

バコッ！

「え!？」

恐らく、爽やか男子の右ストレートがワイの顔面を直撃して、気絶したんだろう…

次に目が覚めたのは、駅前のバス停にあるベンチの上だった。目の前には、爽やか男子。

「すまんやったなあ。つい血が上ったんよ。ハハッ。」

なんて陽気な人だろう。

落ち着いたワイたちは、それぞれの事情を話した。

爽やか男子は、「小川<sup>オガワ</sup> 一<sup>ハジメ</sup>」と言うらしい。

そして、音痴<sup>コエノズシ</sup>は「早河<sup>ハヤカワ</sup> 陣<sup>ジン</sup>」と言った。

二人は、「サンライズ」というデュオを組んで、毎週金曜日にストリートライブをしているそうだ。二人は、ワイにはない魅力を感じる。

「中村<sup>ナカムラ</sup>要<sup>カナメ</sup>って言うんやね〜。変な名前。」

「陣<sup>ジン</sup>！初対面から失礼やる！でも、珍しい名前やね〜！僕はてつきりゴンゾウって言うんかと思った！」

「お前の方が失礼やる！」

この二人は息ぴったりだ。

「あだ名は？みんなから何て呼ばれよるん？」



ワイは、陣<sup>ジン</sup>ちゃんの質問を聞いた時に、嫌な思い出が一瞬で蘇った。  
おデブ、カロリー、モサー、ドメスティックデブ、センチメンタル  
脂肪…

どれも嫌なあだ名ばかりだ。このどれを教えてもまたイジメられる。  
どうしよう…

「どうしたん？言うのはずかしいん？俺なんか、昔マツクに言った時にさ。ケチャップが服に付いただけで「チャプ男<sup>オ</sup>」って2週間は呼ばれよったよ！」

「ははは、だせえ。でも、僕なんか昼休みから帰って来た時、机の上にトウモロコシの粒があっただけで、2カ月間ぐらい「コーン」って呼ばれよったよ！」

「はははっはは！」

なんだか、このふたりの前じゃワイの悩みなんて米粒に見えてきた。ワイは勇気を振り絞って言った。

「も、も、モツサッ！」

あ、やばい。モサーって言おうとしたら噛んでしまった…

「おお、モツサかあ！ええやん！」

「おお、おもしろいやん！んじゃ、今日から俺らの友達な！モツサ！」

友達…。

こんなワイに友達になってくれるの？

ワイは嬉しくて、嬉しくて涙が出そうだった。これからの進む未来が晴れた気がした。

今日から、頑張ろうと心に決めて、新しい友達と楽しい人生をお・

「あ、ところでモツサ。何でさっき噛んだん？」

あ、後から言ってくるパターンなんですネ…

## 第06話 神の声

「あ…、これって御子柴さんの仕業じゃねえ？」

タチバナが嘘をつく時はすぐわかる。しゃべった後に必ずベロを少し出すからだ。

よって、御子柴さん<sup>ミコシバ</sup>なんて人は、俺らの知り合いには存在しない。疑わしい事や、事件が起こると必ず登場する「御子柴さん<sup>ミコシバ</sup>」。

責任転換と言ってしまうばそれまでだが、仲間を疑わないと言っ意味でもある。

俺らの作り上げた御子柴さん<sup>ミコシバ</sup>は、とにかく凶悪人物だ。

数々の窃盗や喧嘩、器物破損を繰り返し、ブタ箱入りは数知れず。複雑な家庭環境で育ったため、グレたらしい。

…あくまでも想像だが。

それに仲間内では、補導された時は必ず御子柴<sup>ミコシバ</sup>と名乗るので、地元警察の中でも要注意人物になっているらしい。

今回、なぜタチバナが御子柴さん<sup>ミコシバ</sup>の名を使ったのかと言うと、さっきあまりにも空腹に耐えかねた俺が、出世払いで頼んだオムライスを、俺がトイレ

に行っている間に何者かに食べられたからだ…。誰だ…。もしかして本当に御子柴さん<sup>ミコシバ</sup>？

「つんな訳ねえやん！食べ物への恨みは恐ろしいぞ。子羊どもっ！」

よく見ると、タチバナとさっきラブレターを渡してその場でフラ

れたモツサ以外

に、にっこりスマイルでこっちを見る奴がいた。

ハジメ  
一だ。

確かコイツは体調不良で学校休んでいたはず…。

とりあえず、3人に制裁を加えて席に座った。

「学校休んだくせに、出てくんなや！」

「いいやん、家におけるの暇やもん。タダ飯も食えたし。」

ハジメ  
一とは小学校からの付き合いで、同じ高校にも通っていた。昔から体は

弱いくせに強がるところが生意気だ。

それに唄が尋常じゃなくうまい。

つい最近、一緒に出場したコンテストで、審査員に「神業」とベタ褒めされていた。

まあ、結果は審査員特別賞で、<sup>ハジメ</sup>一がいなかったら当然とれてない。俺ときたら、唄う場所ごとに「ド音痴」と罵られる。

（それでも死ぬほど練習しとるんじゃ。）

俺はこんな経験から、どんなパフォーマンスを自分の目の前でやっている奴がい  
ても、馬鹿にはしない。

ソイツらが、どんな血のにじむ努力をしたか知らないからだ。

もちろん、罵られたヤツは素直に受け止めないといけない。でないと、成長はない。

早く一との距離を埋めないと。<sup>ハジメ</sup>

俺は、寝る間も惜しんで唄い続けた。そう言えば、どっかのプロ野球選手が言っていた。

「1%の努力と99%の才能でプロ野球に入りました。」  
ん？あ、間違えた。

逆だ。

これじゃ、才能ないヤツは諦めろって言ってるようなもんだ。  
まあ、自分の話はこれくらいにしておく。

一の唄声<sup>ハジメ</sup>が「神の声」と言われる理由は「唄がうまい」の他にもうひとつある。

一<sup>ハジメ</sup>が唄えば、生きてない者まで集めてしまう。要するに、一の唄声<sup>ハジメ</sup>には幽霊を引き寄せる力がある。

最初は俺だって信じちゃいなかった。でも、一<sup>ハジメ</sup>と弾き語りするようになってから、ヤツの発言や行動を目の当たりにすると信じざるを得なかった。

そのお陰で、靈感なんてまったくなかった俺が、気配や声なんか見えたり聞いた  
りできるようにまでなってしまった。

この日も、金曜日だったので皆と別れた後、路上ライブを決行した。夜も遅い事もあって、お客さんも2、3人ほどだった事もあり、1時間ほどで切り上げた。

すると一が、

「今日は、沢山見に来てくれたね〜！」

と、微笑みながら言うもんだから余計に気味が悪い。

「いや、2、3人くらいしか来てないよ！」

「マジ？なら、また見間違えちった。ハハッ。」

ハジメ  
一はたまに生きている人と死んでいる人の区別がつかなくなる時があった。

夜も更け、野良犬の遠吠えがどこからか聞こえてきた。田舎特有のこの静まり返った夜。俺は好きだ。

ギターケースにギターを入れおわると、ふいに一がまじめな顔してこっちを向いた。

ジン  
「陣。」

「ん？」

「いつか二人で、武道館でやりたくねえ？」

「そうやる。サンライズで絶対やるうぜえ。」

忘れもしない…

「<sup>ハジメ</sup>一が「武道館でやりたい。」と言ったのは、後にも先にもこの時が最後だった。

この日は、コンビニでカップラーメンを買って、駐車場で二人で食った。

他愛もない将来の夢の話をした。

でも、その会話に出てくる将来の自分は、穢れを知らない、まっすぐな少年達の心からなりたい自分の姿だった。

だけど、<sup>ハジメ</sup>その時の俺たちには、これから起こる大事件の事も、その引き金が一の能力であるという事も、まだ知る由もなかった。

## 第07話 Blue Candy

今日も昨日と変わらず朝日が昇った。

別に昇らなくていいのに…

朝日が眩しすぎて目眩がしそう。

私はおもむろに写真たてに飾られている写真に目をやった。そこには、嬉しそう

にマイクを持って、フリフリの服を着て唄う幼い私の姿があった。

歌手になる事が夢だった。

有名になって、パパとママに私を捨てた事を後悔させたかった。

うそ…

ホントは私はここにいて見せてあげたかった。

今の事務所に入ったのは私が14歳の時。施設の園長先生が応募してくれたオーディションに受かり、地方の電力会社のCMに出してもらったのがきっかけだった。

この世界で生きていくと決めていた私は、恋もせず、高校にも行かなかった。自

分でもびっくりするくらい必死になって働いた。



でも、現実はそのなにごくはなかった。

ストリップバーや、デパートの屋上でヒーローショウのついでに唄った…。プロ

デューサーに唄いたければ来いと、ホテルに連れていかれた事もあった。あの日

の事は思い出したくもない。

どれも、「売れるためにした事。」「唄うためにした事。」と自分に言い聞かせて生きてきた。

周りで信じられる人なんていないから、唄だけを信じて夢に生きてきた。

あの日までは…

その日は、以前から気になっていた喉のしこりの検査のために病院に来ていた。

「サカグチ坂口さん、サカグチ ミソラ坂口美空さん、どうぞ。」

そう言って、看護師さんが部屋へ案内してくれた。  
中には険しい顔をしたお医者さん。

重々しい空気の中、何だかいろいろ話してきたけど、頭の悪い私に理解出来たのは2つ。

ひとつは甲状腺がんであること。

もうひとつは、手術をすれば腫瘍は取り除けるが、水を飲んだ時むせたり、声がかすんだりする。最悪の場合、声が出なくなる可能性

があると言つ事。

どちらにせよ、今のようには唄えないって事…

1000人に1人はなる病気で死にいたる事はほとんどないと言うが、私から唄を奪う

なら人生を失つたのと同じ事。

まだ18で、これからって時なのに…

手術は成功して、声が出なくなるといふ最悪の結末は免れた。でも、声がかすれ

、前のように唄えない体になってしまった。

もちろん、仕事もなくなり。事務所からは、「アイドル路線で行くか、ヌードかな。」

なんて、皮肉を言われてる。

そして、今日の朝ってわけ。

こんな絶望の淵に立ってるってのに、お腹は言うこと聞いてくれない。さすがに

2日何も口にしなければ当然かあ。

しかたなく、駅前にある「センテツ」と言いつつも行くスーパーに足を運んだ。

牛乳とロールケーキをかごに入れ、レジに持っていく。

すると、やっぱりあの人がいた。

髪はボサボサで、店員とは思えないほどの無愛想な態度。毎週土曜日の午前中には必ずいる。

初めは、「嫌な人」としか思わなかった。

でも、何度も見かけると、不思議と興味がわいてきた。

まず、身なりからして私とタメくらい。近くの高校生つてとこかな。右手でレジ打ちしながら、左手でゴルフボールを2つ持って、手のひらで転がしている。一番、意味がわかんないのは、私が買ったものと一緒に必ずあめ玉をくれる。しかも、いつも青色。

なぜ??

気持ち悪いから一度も口にした事はない。

今日もお決まりの様に青色のあめ玉をかこの中に入れるもんだから、つい。

「あの…。これ何のつもりですか?」

思っている事が声に出てしまった。すると彼は、

「店の商品じゃないけえ、心配せんでええよ。」

「いや、そう言う意味じゃなくて、何でいつもくれるんですか?」

すると、彼は左手の動作を止めた。

「悲しそうな顔をしちゃう女の子には優しくしろって、じいちゃんが言いよったけえ。」

堂々としたはずれな発言をする彼にムカツときた私は、

「迷惑なんで、もうやめて下さい。」

それにはさすがに彼も驚いたらしく「ごめん」と一礼しながら素直に言った。そ

の素直さに、怒りもどっかに行ってしまった。

私がムカついたのは、あめ玉をかごに入れられる事じゃない。

見ず知らずの人に「悲しそうな顔」だという事を見透かされたから。私は、胸の内を誰にだって見せなかった。

見られるのが怖くてわからないように平然を装ってきた。

なのに、彼はだいぶ前から私の胸の内を知っていたって事なの？

そんなことを考えていると恥ずかしさが込み上げて来て、逃げるように出ていつてしまった。

何百メートルか走ると息が苦しくなって、その場で咳込んでしまった。

私の体はだいぶ弱ってた。

すると、後ろに人影があるのに気付いた。

彼だ…

私の後を追っかけてきたみたい。

「な、何っ？なんか用？」

「いや、牛乳とロールケーキ忘れちゃったけ。」

彼は、わざわざ私が忘れたのを届けてくれた。

その瞬間、胸を誰かにつねられた気がした。あまりの突然の事に、両手で胸を押さえるのがやっとだった。

「なら、俺バイト中やけえ戻るわ！」

。

「ね、ねえ。」

一度背を向けた彼は、私の言葉で振り返った。

「あ、ありがとう。」

「おお！ええよ、ええよ。」

「なんで青色なん？」

「え？」

「あめ玉の色、なんで青色なん？」

「ああ、俺のラッキーカラー。俺の好きな『イノセントマン』のメイン色でもあるけど…。」

「あ、そう。よくわからんけど…。私、美空<sup>ミソラ</sup>。あんたは？」

「俺は早河陣<sup>ハヤカワジン</sup>。」

その後、何回か言葉をかわしたけど覚えてない。  
全然タイプじゃないはずなのに、何か変な気持ちになった。

その日以来、「センチツ」に行くときはメイクをして少し大人っぽい服を来ていくようになった。

私のお気に入りのアイテムの中に懐中時計がある。コレを首から下げてアクセサリーにしている。見た目はもちろん気に入っているけど、一番の目的は夢を忘れないため。

この懐中時計の針は、私の大好きな「ボラボラ島」の時刻に合わせてある。いつか、あの島に行ってみたい。コレを見るたびに夢を思い出させてくれるの。

でも、病気の事とか、仕事の事でいっぱいになっていて、いつの間にかただのアクセサリーになっていたのに、陣<sup>ジン</sup>君と話をするようになってから、不思議とその夢を思い出させるようになった。

今日は、土曜じゃないけど、近くの公園でいろんな話をした。

私と同じ「歌手になる」と言う夢があること。  
相方<sup>ハジメ</sup>の一君のこと。

特に、イノセントマンの話は面白かった。

「小さい頃テレビでやりよったヒーローものの番組でさあ。ヒーローになりたいダメ男が、元祖イノセントマンに『次のイノセントマンは君だ。』つつって、勝手に交代させられる所から物語が始まるんよ。」

陣君<sup>ジン</sup>の言葉は、ひとつひとつが前向きで、聞いている私まで元気にしてくれた。

でも、素直じゃない私は、そんな陣君<sup>ジン</sup>といえる時も笑顔になれなかった。

思えば、私は幼いころから「笑わない子供」だった。施設で育て、少ないながら唄の仕事をして、病気になって、唄えなくなっていくだって、一人だった。だから、誰にも期待しないし頼りにしない。そう決めて生きてきた。周りの大人たちは、自分の利益のために私にやさしくしてるだけだった。

だから、こんなにやさしくされるのは初めてだった。

完全に信用したわけじゃないけど、陣君<sup>ジン</sup>とならいつか心から笑えそうなのがする。

そう思えたから、はじめて彼にもらった「青い袋に入ったあめ玉」を口に見てみることにした。

第08話 ただ、1秒でも永く…

季節は、どうやら梅雨明けをして夏を迎えたようだ。ただでさえ暑いのに、オレの大嫌いな蝉の鳴き声のせいで暑さに拍車がかかる。

そんな事はさて置き、コンクリートで有名な我が町に大事件が起りつつある。

それを阻止するべく、立ち上がったのは我々「コウナン厚南倫理委員会」。

そして、会長であるオレは、緊急会議を開くべくマスターズカフェに仲間を集結させた。

「これより、ハヤカワジン早川陣ここ最近、様子がおかしんじゃない？タチバナミ会議を開催します。私は議長を務めます、厚南倫理委員会会長・橘鷗です。よろしく。」

「パチパチパチッ。」

「タチバナって、下の名前ツグミって言うんや〜！ははっ。」

「マスターは黙ってて下さい。」

「かしこまりましたご主人様ってか。」

いつもこの人が空気を台無しにする。



「それでは、まず皆さんからの捜査報告をお願いします。」

「はい、議長！」

まず、最初に手を挙げたのは一だ。

「最近の陣は、路上ライブが終わるなり、そそくさと帰る傾向が見受けられます。以前は、牛丼を食べに行き、今日の反省をしていました。おかしさ満載です。」

「はい、ワイも最近の陣ちゃんの様子はおかしいと思います。なんつうか、ボくっとしてる事が多い気がします。」

モツサは、拳手もせずにしゃべり出した。

「ん、でも様子がおかしいだけでは、話が前に進まんね。」

「はい、はいっ。」

大きく自信満々に手を上げるのは、オレの愛しの怜さん。今日も美しい…

「はい、怜さん。お願いします。」

「はい、早川陣は単刀直入に言って、彼女が出来たのではないでしょうんか？」

自分の子供の話をしているとは思えないくらい嬉しそうだ。でも美しい…

それにしても、みんなの言う通り、ここ3ヶ月くらいの陣<sup>ジン</sup>は様子がおかしい。

怜<sup>レイ</sup>さんの証言じゃあ、夜遅くに出て行く事が多くなって、食事もろくに  
とらないらしい。

我々、「厚南倫理委員会」の会議で「恋の病」で間違いないという  
結論にたどり着いた。

「陣<sup>ジン</sup>のやつも、とうとう童貞卒業かあ。」

マスターは最後まで口をはさんできた。

そんな事より、ここ最近マスターと怜<sup>レイ</sup>さんが前より仲良くなっていること  
が気になって仕方ない。確か以前はゴタゴタがあつて怜<sup>レイ</sup>さんはこの  
店に来ることもなかったのに…。

そんな事を考えながらオーレは家路につく。

自分の部屋に入るなり教科書を開き、勉強を始めた。受験生のオー  
レにとって一秒でも無駄には出来ないのだ。

。

「<sup>シグミ</sup>鶯〜！」

一階から母の声がした。

勉強に没頭しすぎて時間を忘れていたみたいだ。きっと夕食の時間だろう。我が家の夕食は一般家庭と比べて、少し遅い。父親の仕事の関係とかで20時〜21時くらいになる事が普通。オーレは階段を降りてリビングに向かった。

すると、母親が出てきた。

「玄関に、<sup>ナカムラガナメ</sup>中村要君って子が来てるけど。」

<sup>ナカムラガナメ</sup>中村要…あ、モツサだ。

こんな時間に何の用だろう。不思議に思いながら玄関に向かった。すると、息を切らしたモツサが立っていた。

「ど、どうしたん？そんなに慌ててから。」

「はあ、はあ。タチバナちゃん。大変っちゃ！<sup>ジン</sup>陣ちゃんが…、倒れて病院に運ばれた。」

モツサが慌てふためいていたものだから、とにかくシュークリームと牛乳で落ち着かせた。

それから、オーレたちは<sup>ジン</sup>陣が搬送されたと聞く病院へ向かった。

病室には、ベッドに横たわった陣<sup>ジン</sup>、それを横で心配そつに見守る怜<sup>レイ</sup>さんの姿があつた。

オーレとモツサは出口付近にいる一<sup>ハジメ</sup>に声を掛けた。

「病状は？」

「お、タチバナとモツサかあ。軽い貧血みたいやけえ、心配ないよ。ただ…」

「ただ、なに？」

翌日、陣<sup>ジン</sup>は退院した。

その日の午前中、オーレとモツサは、一<sup>ハジメ</sup>に誘われて図書館にいた。調べる事があるとかで…

そして、夜になるのを待ち、陣<sup>ジン</sup>が毎日のように来る、公園のそばでみんなとおち合った。

「そんなに毎日、公園で激しい事しよんかね。」

「下ネタやん。」

しょうもない一<sup>ハジメ</sup>のボケについツツコミを入れてしまった。

モツサは、晩飯を食べてないとかで、インスタント焼きそばを食べていたが、それをツツコむほどオーレはお人良しじゃない。まあ、本人はボケて

いないと思う  
が。

「来たよ…」

ハジメ  
一の一言で、オレとモツサは公園のブランコの方へ目をやった。

陣<sup>ジン</sup>  
陣が1人で来た。

そして、ブランコに座り、何やら独り言をしゃべり出した。女の子  
が来る前に予行練習でもしているつもりか。どうやら、コイツの恋  
の病は重症のようだ。

ハジメ  
見かねた一は、速歩きで陣<sup>ジン</sup>の元へ向かった。すかさず、オレとモ  
ツサも後をつける。

陣<sup>ジン</sup>  
「陣、その子はもうこの世にはおらんよ。」

陣<sup>ジン</sup>  
陣はその言葉で立ち上がり、ハジメ  
一を睨み付けた。

「お前、アホか！美空<sup>ミソラ</sup>は目の前にちゃんとおるやろうが！」

しばらく2人の会話の意味がわからなかった。ただ、少なくとも、  
オレとモツサには女の子らしき姿は見えない。

「美空<sup>ミソラ</sup>さん、お願いします。陣<sup>ジン</sup>を返して下さい。このままでは、あ  
なたに生気を吸いとられて、やつれていき、死んでしまいます。僕  
にとって陣<sup>ジン</sup>はかけがえのない人間なんです。どうか、返して下さい。」

「

「一は、<sup>ハジメ</sup>そう言いながら土下座して、デコを地面に擦り付けた。

すると、オーレの耳にもどこからともなく、女の子の声が聞こえはじめた。

「頭を上げて下さい…。そうでしたか…。私は死んでいたんですね…。」

「そんな訳ないやん！お前はちゃんと生きちようよ！—！<sup>ハジメ</sup>デタラメ言う

なや！」

感情的になった陣<sup>ジン</sup>とは反対に、一は<sup>ハジメ</sup>顔を上げると穏やかに続けた。

「坂口美空、<sup>サカグチ ミソラ</sup>18歳。10年前、日差しの強い朝に「センチ」の屋上から飛び降り自殺した。原因は不明。と、当時の記事に書いてあった…。ごめん、陣<sup>ジン</sup>。おそらく、僕と一緒にいるせいで霊感が強くなってしまったみたい…。」

図書館に行った理由がその時わかった。一は、<sup>ハジメ</sup>陣<sup>ジン</sup>の恋人が幽霊だと気づいていたって事なのか…  
陣<sup>ジン</sup>は、大きく首を振りながら、

「そんなん、うそじゃ…。」

一は<sup>ハジメ</sup>立ち上がり、陣<sup>ジン</sup>の肩に激しく手を置いた。

「うそやないっちゃ！このまま彼女とおったら、生気を吸いとられて死ぬよ！」

急に、一の背後がぼんやり光りだした。それを見た陣は一の手を振り払い、ぼんやりと光り出した方へ駆け寄ろうとしたが、一、必死で陣の体を押さえ、それ以上前へ進ませないようにした。

「お、おいっ！美空あああっ！行くなっ！まだ、お前の夢は叶っちゃらんやろっがあああっ！どっちが先に叶えるか勝負するんじゃないんかああ！」

「陣君が叶えて…私の歌手になる夢…。」

「…何言いよんか！なら、せめて俺も一緒に連れて行けっ！ひとりでなんか行くな！俺がずっとお前を守るけえっ！」

「ダメ…絶対ダメ。」

陣はさっきよりも強い力で一を振り払おうとするが、一はびくともしなかった。ここで手を離してしまったら陣を連れて行かれると思ったのだろっ。

オレとモツサは、なすすべもなくその場に立ち尽くす事しか出来なかった。

「もつと早く陣君に出会えれば良かった…。そしたら、自分で命を終わらせるなんて馬鹿なこと考えなかったのにね…。でも、もし…わがままな私のお願いを聞いてくれるんなら…。」

その声の主は、静かに一言づつ大事にしゃべっているように感じた。

「…私の生きれなかった明日も明後日も生きて…唄ってほしい…。それで、その声を天国まで届けてほしい…。それなら、寂しくない

よ…。」

少し間をあけて、陣<sup>ジン</sup>は何かをこらえるように言った。

「…それなら心配すんな。天国のどこにおつても聴こえるくらい、ぶちデカい声で唄<sup>ウタ</sup>っちゃるけえ…。」

「ごめんね…。陣<sup>ジン</sup>君を、困らせるつもりはなかった…。ただ…ただ、一秒でも永く…一緒におりたかっただけなんよ…ごめんね…。」

その声が途切れると、一瞬辺りが光った気がした。その光のあとにその声が聞こえる事はなかった…

「謝るなあやあああつ！」

そう言つて、陣<sup>ジン</sup>は膝から崩れ落ち、幼児の様に泣きわめいた…。こんな取り乱す陣<sup>ジン</sup>を見るのは、後にも先にも初めてだった。

決して結ばれない2人の恋が終わった…

オカルト現象など信じないオーレにとって衝撃的な日になった。

ただ、これが真実であるのなら、世界一美しい恋の終わりを目撃したことになるだろう…



## 第09話 スタンド・バイ・ミー

幼い頃から、笑ったことのないと言っていた美空<sup>ミソラ</sup>が、最後に笑っていた。

何を意味するかは知らないが、彼女を失った俺にとって、それが唯一の救いだった。

一晩中泣き続けた後、不思議と気持ちは晴れていた。でも、今日は学校をサボることにした。

そして、朝からマスターのところに行った。

「カラン、カラン。」

「お、陣<sup>ジン</sup>かあ。」

マスターは、事情を知ってか知らずか、学校をサボったことも、俺の目が腫れていることも突っ込まなかった。ただ、黙ってコーヒーを出してくれた。

「マスター…。あのさあ…。」

「ん?! 何も言わんでもええ! 大体の事は聞いたけえ! お前も失恋する年になったかあ。世も末じゃの〜! ハハツ。まあ、俺も若い頃は、いろんな恋をしたもんいや。」

「へええ。」

俺は、話が長くなりそうだったので、素っ気ない返事をした。

「まあ、聞けつちや。お前と同じ年の頃な、大恋愛したんじゃけえ。」

自分の事をあまり語らないマスターが、よりによって恋愛話とは、かなり興味深い。

「黒髪のように似合う、綺麗な子やったの。」

「それで!？」

まずい…。思っていた事がつい口に出てしまった…。これでは、マスターの思う壺だ。案の定、マスターは勝ち誇った顔をして続けた。

「猛烈アタックの末に、付き合えることになってのお。そりや、毎日バラ色のようにやったぞ。」

表現が古い…

「やけど、結局別れたんよ…。」

「なんでなん？」

「身分の違いってやつやの。正確には別れさせられたんよ。彼女は、どっかの財閥の娘やったけえ、こんな貧乏人とは付き合わせないって言われたけえの。」

「それで、すぐ引き下がったんっ!？」

俺はちよつと熱くなり、声のボリュームが上がってしまった。

「いや、諦めきれんやった。何度も何度も、その子の家に行つてはボディガードみたいなごつい兄ちゃんにつまみ出された。悔しゅうて、悔しゅうての…。何回も世間を恨んだいや。」

「そうか…。」

「陣<sup>ジン</sup>。俺が何を言いたいかわかるか？」

「…。いや、わからん。」

「外人やろうが、同性やろうが、幽霊やろうが、一国のお姫さんでも関係ねえんよ！誰が誰を好きになろうが、自由なんちゃ。ただ、本当に好きになった女なら、誰に何て言われようが負けちゃいけない。これかも、ようけ（沢山）恋をするやろうけえの。よう覚えちよけ。俺はお、相手を見かけだけで判断せんで、正々堂々と誰かをまっすぐ好きになれるお前を、誇りに思うちよう。」

その力強い言葉に圧倒されて、涙が止まらなくなった。

すると、人が気持ち良く泣いている所に、荒々しくドアを開けて入って来る人の気配を感じた。

「あゝ、今日も暑いですねー！マスター。」

よく見てみると、ハンカチをうちわ代わりにしてあおぎ、ピッチリスーツの男がなれなれしくマスターに話しかけた。  
マスターは、その男を見ると焦った顔をして俺に言った。

「陣！もう、話は終わりじゃけ、俺はコイツと話があるけえ、もう帰れ！」

「お、おう。」

俺は、少し様子のおかしいマスターの表情に動揺した。そして、ピッチリスーツ

の男を見るのは初めてだが、あいさつもせずにそのまま店を出た。

外に出ると、もう昼過ぎで太陽が一番高い所にあつた。今日は金曜日なので、路上ライブして気持ちを切り替えようと、自宅に帰った。

俺たち「サンライズ」の路上ライブは2時間くらいと決めている。最初の頃は6時間や8時間はやっていた。

だが、それは路上ライブではなく、ただ自己満足に過ぎず、誰も楽しんでくれない。

お客さんが楽しんでないと、俺たちが成り立たない。最近その事に気付き、ライブ前に俺ん家に集まり、曲順やトークの内容も考える。フリーハンドではあるが、毎回チラシも作るようにした。

今日も少人数ではあるが、俺たちの唄を聴きに来てくれる人たちのお陰で、大盛況でライブが終わった。

まだ、ライブの興奮が冷めやらぬ中、一が俺に真顔で言った。

「新川行こうぜ！」

「ええけど、どうやって？」

「線路を歩いて行こうや！」

ここの宇部駅から新川駅までに3駅ある。距離にして約5〜6キロ。でも、少し面白そうだったので軽く返事をしてしまった。

ハジメ  
一の提案で、財布は駅周辺に隠して行くことにした。彼曰く「大冒険には試練が必要。」らしい。

それに、電車が1時間に1本しか通らないので、1時間以内に新川駅までに到着しないと、大変なことになる。

ハジメ  
一が、俺の気を紛らわせようとしてくれているのはありがたいが、少し危険な臭いがする。

20時台の電車が宇部駅を出発するなり、俺たちも出発した。線路は、電車の為に作られたもの。だから、人間の俺たちは当然歩きにくい。やたらでかい石があつて、その石が足の裏のツボを刺激して、ほどよく痛い。

ジン  
「陣、覚えちようか。昔よくこの辺で遊びよったね。」

ハジメ  
一が指さしたのは、第一公園。本当は違う名前だと思うが、俺たちはそう呼んでいた。

線路側から見るのは初めてだが、懐かしい。

「そつやの。毎日いろんな事語りよったの。」

しばらく歩くと、厚東川の鉄橋に差し掛かった。

「まさかかと思うけど…。渡るん？」

「当たり前やん。」

<sup>ハジメ</sup>一が悪そうな顔をした。

厚東川に掛かる鉄橋は500メートルはある。もし、渡っている途中に電車でも通るもんなら、川に飛び込むしか生きる道はない。でも、海まで通じているせいで、干潮の時間帯は極端に潮が引いている。要するに、飛び込んでも大惨事って事。突き指だけで済みそうにない。

<sup>ハジメ</sup>

一をふと見ると、顔は冷静を装っているが、内心は逃げ出したくてたまらないと言わんばかりに、手足が震えている。

小さな物音にもビクビクしながら、俺たちは鉄橋をなんとか渡りきった。

しばらく歩くと、目の前の信号が変わり、遠くで「カンカンカン。」と聞こえてきた。

「やべえ、電車来た！」

そう、言いながら俺たちは猛ダッシュで線路の上を走った。目の前に、岩鼻の駅が見えた。

即座に、ホームにかけあがり、難を逃れた。

「はあ、はあ。死ぬかと思った。」

「よし、電車も行ったし。あと一時間は安全じゃけえ、安心して進めるね。」

今さらながら、一は<sup>ハジメ</sup>ヘタレのくせして好奇心だけは旺盛だ。

また、しばらく線路の上を進むと、先頭の<sup>ハジメ</sup>一が急に立ち止まる。

「あ、何かおる！」

<sup>ハジメ</sup>一の指差す方を見ると、林の中でぼんやりと輝く物体を見つけた。

「ん、幽霊かなんか？」

俺は、<sup>ハジメ</sup>一のお陰で幽霊を見ても驚かなくなった。

「うん、『背の高いおっさん』が向こう側を指差しちよう！その方向に何かあるんかねえ。」

確かに、言われてみればそう見える。<sup>ハジメ</sup>一はすぐさま脱線し、林の中に走って行った。

「おいっ！趣旨变つてくるやん！」

俺はそう言いながらも、<sup>ハジメ</sup>一を追いかけていた。林は俺の胸元まで生えていて、おまけに地面は湿っている。そんな事もお構いなしと言わんばかりに<sup>ハジメ</sup>一は草をかき分けながら進む。『背の高いおっさん』が指差している辺りに来てみると、黒いアタッシューケースが落ちていた。そんなに古くないが、見るからに怪しい。

「あの『背の高いおっさん』の、落し物なんかね？」

そう言いながら、<sup>ハジメ</sup>一と俺は『背の高いおっさん』の居た場所に目をやった。

「おらんくなつちよう。」

と、俺が言うのと同時に「なら、開けてみよう。」と、<sup>ハジメ</sup>一はいつもの傍若無人ぶりを発揮した。

「おい、<sup>ハジメ</sup>一！やめちよけ！爆弾とかやったらどうするんか！」

「カチャツ。」

俺の声は、届かなかった。

「うおおおおお！」

アタツシケースを開けた<sup>ハジメ</sup>一が急におたけびをあげた。

「どうしたん？何が入っちゃったん？」

「陣<sup>ジン</sup>…。ヤバい。僕ら…大金持ちやん。」

<sup>ハジメ</sup>一は、そう言いながら一万円の束を自分の頬に当てて見せた。  
驚いた俺は、すぐにアタツシケースの中身を確認した。中には、  
大量の札束がご丁寧に並べてあった。

「や、やべえ…ほんとじゃ！」

「うおおおおお！」

とにかく、俺たち二人は高校生らしく、絶叫することにした。

「誰が、何の目的で、どうやってここに置いて行っただんかねえ。」



ハジメ  
一の言う通りだ。俺たちは、何か大きな事件に巻き込まれてしまったのか。

「さっきの『背の高いおっさん』がキーパーソンってとこやの。」

「ん？キーパーソンってなに？」

「…。鍵を握った人物ってこと！」

「ああ、そっちの事ね！」

どっちの事だ！俺は、確かに学校では馬鹿だと思われている。でも、あくまでペーパーテストが出来ないだけ。なら、『キーパーソン』も知らない一は、俺以下ってことだ。

「とにかく、ここに置いちゃってもしょうがないし、持っていこうぜ！」

俺はそう言うと、大事そうに札束を持つ一からお金を回収し、アタツシケースを持って線路まで歩いた。  
なぜかそのまま、俺が持つはめになったアタツシケースは、大金を入れているだけあって、かなり重い。

「んで？宇部駅に戻る？」

「いや、新川まで行こうや！」

「え？こんな大金持って行ったら怪しくない？いったんどっかに隠そうや！」

「一回行ってくて言ったら行くそつちゃー!!」

ハジメ

一の頑固もここまで来ると、ただのダダッ子だ。

そして、新川駅に着いた。切符を持っていない俺たちは、改札口を通らずに近くのアフェンスを乗り越えて行くことにした。

「おい!何しよんか!運賃払わんか!」

駅員に見つかってしまった。

「僕たち、電車に乗ってません!」

「嘘つくな!なら、なんでアフェンスよじ登りよんか!」

おっしやる通りだ。

でも、今の俺たちは、大金を持っている以上、簡単に捕まるわけにもいかない。

逃げる俺たちを、執念深く追いかけてくる駅員さん達。車に乗って追っかけてくる人も出てくる始末。そこまでしなくても、思うくらいの人数に追い回された。

後から聞いた話によると、この地域で無賃乗車が多発している事から、今が『無賃乗車撲滅強化月間』だったらしい。

なんとか、俺たちは『そこまでしなくても、思うくらい的人数の駅員さん達』から逃げ切る事が出来た。

次の日のホームルームで、担任が生徒に向けて今回の騒動を連絡

事項として話している時、俺たちは優越感に浸っていた事をよく覚えていた。

そして、この時から俺たちは、徐々に大事件の表舞台に出て行く事になる…

## 第10話 2つの事件

「ぜ、全部で、5380万円あるっちゃ！」

「おおおお。」

俺たちは、タチバナの一言で、事の重大さを改めて知った。

「林の中にアタッシュケースね…。怪しすぎるやろ…。何かの事件に巻き込まれる前に、警察に持って行こうや！」

確かに、モッサの言う通りだった。

「んゝ、まあ、待てっちゃ！警察ならいつでも届けれる。今は、何でもこんな大金が林の中にあつたのが重要やろ？んゝ、考えられるとすれば、『マフィア同士の抗争に必要な軍資金』

『銀行強盗した犯人が逃走中に仲間裏切られ、殺されると気づいた一人が、金だけをあそこに隠した』

『コノーティヌティラナ星人の侵略を防ぐために立ち上がった防衛軍が、全員疫病に感染してしまい全滅。そして、残された運営費と地球の運命。』くらいかな。」

「リアリティ、ゼロかつ！最後の方とか、完全に作り話やし。タチバナの空想はマニアックなそっちゃ！」

ハジメ  
一の言つ通りだ。

俺たち4人は、かれこれ2時間も出口のない討論を繰り広げている。

アタツシケースは、俺の部屋にある押し入れの奥に、とりあえず隠してある。

その流れで、学校帰りに俺ん家で2時間前から会議を開いていると言っわけだ。

「まあ今はさ、何で大金が落ちちよったかを追究してもしようがないけえ、このお金をどう使うか考えてみん？」

さっきまで「警察に持って行こう。」とか、言っていた人間の発言とは思えないが、モツサにしては、良いこと言った。

「そうやお、これ使ってアジト的なものでも作っちゃう？」

俺の意見に、始めに乗ったのはタチバナだ。

「ええのお、そう言うのあったらクソかつこええやん！」

「じゃあさ、ライブハウス作ろうや！」

ハジメ  
—らしい意見だ。

「いいねえ！観葉植物いっぱい飾ってさあ！あと、キッチンは広めにね！」

モツサが、食べ物以外の事で感心を持っていることに少し驚いた。

「世界各地のお酒とか、絵画とか本とか置こうや！でもまあ、実際に理想のライブハウスなんて作ろうと思ったら予算オーバーやけどねえ！」

タチバナは、ズレた眼鏡を戻しながら、俺たちを現実に取り戻すような事を言った。

「でもさあ、僕らでいつか本当に作りたいね。」

ハジメ  
「は、遠い目をしながら言った。」

無言で俺たちも頷いた：

「名前は『キング』がええ！一般的には王様って意味やけど、『最大のもの』って意味でもあるんよ。ちよつと無理やりやけど、『僕たちの最大の夢の果て』って意味で『キング』ってどう？！」

ハジメ  
「は、興奮ぎみに言った。」

「『僕たちの最大の夢の果て』かあ、何かブチすげえやん！なら、俺らのライブハウスは『キング』に決まりじゃあや！」

俺も、触発されて興奮ぎみになってしまった。

この時の俺たちの目は、若さゆえに希望に満ち溢れていた。何の先入観もなく、

どんな事に対しても素直に目を向け、制限なく夢を見ていた。

そして、大人になれば車にも乗れるし、学校にも行かなくてもいいし、先生や親に縛られることもない。今以上に自由に生きられるんだと、本気で信じていた。

「そう言えば話変わるけど、陣<sup>ジン</sup>。マスターの事、聞いた？」

楽しい会話の中、タチバナは意味深な事を言い出した。

「ん？マスターが何なん？」

「昨日、夕方くらいに店の前をたまたま通ったんよ。そしたら、マスターに会ってさ。理由は知らんけど、店閉めるらしいよ。」

「え？何それ！初耳っちゃ！」

マスターは、俺には何も言ってくれなかった。

ふと、あの時マスターズカフェに来た、ピッチリスーツの男の顔が頭の中を過った。

「あ…。ちよつとごめん、マスターん所行つて来る！」

俺は、討論の途中ではあったが、嫌な予感がしたので、急いでマスターズカフェに向かった。

夕方だと言うのに、外に出るなり汗が吹き出した。

5分ほど走るとマスターズカフェの看板が見えた。店は夕チバナの言う通り、閉まっていた。

ガンガンガンッ。

俺は、壊れてしまいそうなくらい扉を叩いた。

「マスター！マスタああ！」

うんとも、すんとも言わない。

父親の顔も知らない俺にとって、マスターは父親同然の様に慕ってきた。

でも、今になってよく考えたらマスターに関して俺は知らない事が多すぎる。知っている事とすれば、バツイチで前の奥さんは<sup>レイ</sup>怜と高校時代からの親友って事。あと、地元は大阪だったと言っていたくらいだ。

いつの間にか、辺りは真っ暗になってしまっていた。

俺は、どうしようも出来ず、ズボンのポケットに手をつ込んで家路に着いた。家の扉を開けると、俺の部屋から数人の話し声が聞こえた。アイツらは、まだ帰ってないようだ。その足で、リビングにいる<sup>レイ</sup>怜に話しかけた。

「<sup>レイ</sup>怜、マスターどこに行ったか知らん？」

「ん？、陣<sup>ジン</sup>じゃん！帰っちよったんやね。マスター？見てないね、スロツトじゃない？」

ビールを飲みながらテレビを観て、適当に俺の質問に答える姿に少しイラッとしたが、もっと許せないのは<sup>レイ</sup>怜の格好だ。自分の子供の友達がいるつつうのに、ド・ピンクのランジェリー姿。母親じゃなければ、ぶん殴っている。

タチバナに見られでもしたら、「ほげっ」なんて言って、鼻血出して失神してしまうだろう。

「ほげっ。」

…遅かった。

タチバナは、冷蔵庫の前で鼻血を流しながら倒れた。後頭部を強打したらしく、のたうち回っていた。おそらく、ジュースか何かを取りに来たんだろう。



「おい、怜<sup>レイ</sup>！服着ろっ！思春期の子供には、刺激が強すぎるやろっがっ！」

「え、だつて暑いんやもん。」

と、ダダをこねながら、怜<sup>レイ</sup>はビールのおかわりを取りに冷蔵庫の方へ歩き出した。

まずい、またタチバナに見られてしまう。次は、確実に失神する…。

「あら？タチバナ君。こんなとこで何しよん？」

タチバナは、その声に気付き怜<sup>レイ</sup>の方を見るが、「おふつ。」と言いながら、鼻の両穴から噴水のごとく血が吹き出した。

「あ、怜<sup>レイ</sup>さん。お邪魔ちいてますい…。」

タチバナ自身は、冷静を装っているつもりようだ。でも、俺には白目をむいて倒れている哀れなヤツにしか見えない。

「タチバナ君、すごい鼻血…。大丈夫！？」

「お前のせいじゃ！」

あまりにももの無神経さに、実の母親にツッコんでしまった。そんな茶番劇が終わると、モツサと一<sup>ハジメ</sup>もリビングにやって来た。

怜<sup>レイ</sup>は渋々、短パンとTシャツに着替え、先程とは打って変わって真面目な顔で、ソファに腰掛けた。そして、壁の方を見たまま重い

口を開いた。

「松園組って知っちゃおう？」

いきなり何を言い出すのかと思えば、全国的に有名なヤクザの名前だった。俺は、話の続きが気になったので「お、おう。」とだけ言うと、次の言葉を待った。

「幹部が大阪にあるんやけどさ、どうやら内部でいざこざがあつて裏切った仲間がどうやらこの辺りに逃げて来たみたいなんよ。」

「え？それとマスターの失踪って関係あるん？」

俺が返そうとした内容を、<sup>ハジメ</sup>一に言われてしまった。

「大アリなんよ。マスターは、松園組の組長の弟なんよ。そんで、ゴタゴタを起こしたのが、マスターの元舎弟なんよ。そんで……」

あまりにも驚きの内容に、<sup>レイ</sup>怜がしゃべり下手だということを忘れていた。

どうやら、マスターは松園組の元幹部で、ヤクザから足を洗い山口県で静かに暮らしていたと言う。

今回、松園組の中で抗争が起こり、主犯格が山口県に逃げ込んでいるそうだ。<sup>レイ</sup>怜の話では、マスターはその元舎弟を匿うために失踪したのではないかと言う事だった。

「って事は、今この街には危険きわまりない松園組がウヨウヨいるって事ですよね。<sup>レイ</sup>怜さん、夜の一人歩きは気を付けて下さいね。」

さっきまで横になっていたタチバナが、ある程度落ち着いたので

おもむろにしゃべりだした。

「陣<sup>ジン</sup>、じゃあ僕たちが林の中で会った『背の高いおっさん』も松園組と何か関係ありそうやね。主犯格の一人やない？」

ハジメ  
一の言う事が確かなら、すでに死人が出ている大事件になる。そうなると、大金と松園組は繋がっている事になる。俺たちは、拾ってはいけないモノを拾ってしまったに違いない。皆もその事に薄々気付き始めているのか、顔色が悪くなった。

18年間生きてきて、初めて命の危機を感じた。もし、このお金がヤクザのものだったら、俺たちはどうなるのか？

「どうやって見つけたのか？」と聞かれても、口が裂けても幽霊に教えて貰ったなどと言えるはずもない。そうなると、今回の抗争に俺たちが関わっていると誤解される可能性が高い。きっと、拷問にかけられて、富士の樹海に捨てられるか、ドラム缶に入れられて海に沈められる。

こんな平和な時代に、命の危機に直面している高校生など全国探してもいるはずない…。

なぜ、俺たちなんだ…考えれば考えるほど吐きそうになってくる。

「うつ…。」

モッサは、両手で口を塞いだ。おそらく、俺と同じ事を考えたのだろう…

さっきまで賑やかだったリビングが静まり返り、バラエティー番組が流れるテレビの音だけ悲しく響いていた。

## 第11話 不可解な点が多いチェーンメール

この世界の裏側で今、何が起きているかなんて知らない。

ワイの生きているこの街にも、ワイの理解を越える出来事なんて沢山ある。それは当然の事だけど、そう考えると少し怖い。

今、まさにその理解を越える出来事が目の前で起こった。

授業中にもかかわらず、開いた携帯にメールが届いていた。中身を見ると、一気に血の気が引いた…

「岩鼻公園の都市伝説。昔、岩鼻公園が「第一公園」と呼ばれていた頃。怪事件が多発しました。内容は、通りすがりの人達の鼻が切断されると言うものでした。被害者は、犯人の顔を見ておらず、ただ「背の高い中年の男」と言う事だけしかわからなかったそうです。被害者は何百人にも膨れ上がり、警察は頭を抱えていました。そんなある日、公園の近くを通りすぎる背の高い中年の男に職務質問をしたところ、急に男が逃走。そして、逃走中に男は車にはねられ死亡。一件落着かと思いきや、後日、真犯人が出頭して来たそうです。動機は、ただ鼻を集めたかったからの事。警察の誤解で事故に追いやってしまった「背の高い中年の男性」の遺族に、後日慰謝料が支払われたが、そのお金を受け取ってすぐに家族全員が第一公園付近の岩に頭を強打し、自殺。多額の慰謝料も見つけることはなかったそうです。その無念な思いから、街の人たちは「岩鼻公園」と呼ぶようになったそうです。このメールを見た人は、今から3日以内に3人にこのメールをまわして下さい。そうしないと、祟られてしまいます。」

よくあるチェーンメールだったが、話がやけに出来過ぎている。確か、陣ちゃん<sup>ジン</sup>と一ちゃん<sup>ハジメ</sup>が大金を拾ったのは岩鼻公園駅付近。要は、岩鼻公園の近くって事だ。それに、『背の高いおっさん』の幽霊を見たと言っていた。

ワイは、早くこの事を知らせたい気持ちと、心のどつかで「祟られるのも嫌だなあ」という気持ちでいっぱいになり、とっさに陣ちゃん<sup>ジン</sup>と一ちゃん<sup>ハジメ</sup>とタチバナちゃんにメールを転送した。

すると、後ろ姿ではあるが、3人の仕草で携帯のバイブが振動し、メールが届いたのがわかった。それぞれ、先生の死角を使い器用に携帯を取り出しメールをチェックしていた。

しばらくすると、またワイの携帯にメールが来ていた。今度は3通も。中身を見ると、ワイが3人に送ったメールがそれぞれ転送されて返ってきた。

これを世に言う「チェーンメール返し」だ。今度は9人に送らないといけないと思うと、頭が痛い…。

放課後に中庭でみんなと合流して、緊急ミーティングをした。内容はやはり「不可解な点が多いチェーンメール」だった。

最初に話を切り出したのはタチバナちゃんだった。

「んー、なんかタイミング良すぎやろー」

「ん？何が？メールの内容の事？」

ワイは、話についていこうと必死に質問した。

「内容もやけど、そもそもこんなメール自体送られてくるのがおかしい…。陣<sup>ジン</sup>たちがアタツシケースを拾ったのは2、3日前なのに、もうその内容に触れたメールが出回っちゃう。あれはオーレ達しか知らんはず…。送った犯人がその場にいたか、この中の誰かがチクったとしたか考えられん…。」

そう言うのと、タチバナちゃんは疑いの目でワイの方を見た。一瞬、背筋が凍りついた。

「ちょ、ちよつと待ってえや！ワイが他の人に言うわけないやろ！」

必死の弁解にタチバナちゃんは、ニコツと笑いながら続けた。

「嘘いや、オーレ達の中に、そんな事するヤツなんておらんに決まっちゃうやん！ごめん、ごめん。」

ソレを聞いて、ワイは「ほっ」とした。

そう、タチバナちゃんの言う通りワイ達は固い絆で結ばれているんだから疑う事すら馬鹿馬鹿しい。

「まあ、とにかく、メールの件、『背の高いおっさん』が教えてくれたお金の件、それで、マスターの失踪…。全部いつぺんに考えても埒が明かんけえ、手分けして真相を確かめようぜ！」

流石、陣<sup>ジン</sup>ちゃん。この人は、いつもビシツと筋の通った事を言う。このしつこくないリーダーシップがみんなから愛される由縁なんだろう。

結果、ワイとタチバナちゃんはチェーンメールの出所を調べるこ

とに。<sup>ハジメ</sup>一ちゃんは、もう一度『背の高いおっさん』の幽霊を見付けてお金の出所を調べることに。そして、陣ちゃん<sup>ジン</sup>は、マスターを探す事になった。

ワイとタチバナちゃんは、まずワイにチェーンメールを送ってきた北島くん<sup>キタシマ</sup>に会いに、彼の家に向かった。

図々しく、家の中に入り込み話を聞くと、彼もメールを送られた側の人間と言う事がわかった。メールを送ってきたのは、同じク拉斯の田中くんだった。

すぐさま、彼の家に向かった。そして、本人に直接話を聞いたが、田中くんもメールを送られた側だった。そうして、4〜5人の家を回った頃、気分の悪くなるような名前が浮上してきた。

「<sup>コンドウ</sup>近藤」だ。

そう、中学の時に散々いじめられたヤツだ。正直言うと、名前を聞くだけで辛かった思い出がフラッシュバックするほど嫌だった。タチバナちゃんも、その過去を知っているので、「ここからは、オレひとりやる。」って言うてくれたけど、ワイは「気持ちは嬉しいけど、一緒にやらしてほしい。」と返した。

それは、過去の自分から逃げたくないのと、今は昔とは違い、信賴できる仲間がいるからだ。

<sup>コンドウ</sup>近藤は噂によると、高校には行かず、山口県では有名な暴走族『トップブラザー』の総長をしていると聞いた。

どうやら、メールの出所はトップブラザーのメンバーからのようだ。今日は、夜も遅くなったという事で、調査は次の日に繰り越され

た。

家に帰り、お風呂に入ると、自分の手の震えにようやく気付いた。ヘタレで優柔不断なワイが、何かの目的のために危険をおかそうとしている。その震えは、恐怖からでもあり勇気の現れにも感じた。

次の日は、思ったよりも永く感じた。

その日は、退屈な終業式だったが、長い夏休みの始まりを告げる合図でもあった。

これからは、存分に事件の真相を追及できる。

今日も一度、中庭に集まり、中間報告をしてバラバラに動いた。ワイたち以外は進展なしのようだった。

タチバナちゃんとワイはトップブラザーの溜まり場になっているユーズボールに行った。

ユーズボールは、娯楽の少ないこの辺で唯一のアミューズメント施設。子供から大人まで楽しめるだけでなく、学校の友達と会いたければ大概はココに居るというくらい、街の人から愛されている場所だ。

ワイは、初めは近藤<sup>コシドウ</sup>を探す使命感でいっぱいだったが、あまりにも楽しそうな格闘ゲームを見つけてしまい、つついお金を入れてプレイしてしまった。

時間を忘れるほど熱中していたワイの肩を、誰かが強めに叩いた。ワイは、とっさにタチバナちゃんだと判断し、「ごめんっ。」と言いながら振り向いた。

すると、そこにはタチバナちゃんと似ても似つかない大男の姿があり、何人もの柄の悪い人たちを従えていた。



「よう、モサー。まだ生きちよったん？」

その声を聞くだけで血の気が引いていくのがわかった。右頬に縫い傷があり、獣のような冷酷な目、紛れもなく近藤<sup>コンドウ</sup>本人だった。近藤<sup>コンドウ</sup>は、ワイを舐めまわすように睨みつけるところ言った。

「お前ら、でしゃばり過ぎっちゃ……。お仕置きせんといけんのぉ、モサー。」

その獣のような目玉が一瞬、獲物を捕らえたかのように鋭く尖った様に思えた。

## 第12話 仲間はブチ大事にせんにゃいけん

夏休みに入ってまだ二日目だというのに、俺は学校の職員室の来客用のソファに腰掛けていた。

昨日もマスターの消息に繋がる手掛かりすら見当たらなかったのに、こんな所で油を売っている暇なんてない。

でも、目の前には見事にハゲ散らかした教頭が、腕を組みながらギョロリと俺を睨み付けていた。

朝だと言うのに既にサウナ状態の職員室。

中には俺とハゲ散らかした教頭と体格の良い体育教員だけ。「絵的に寂し過ぎる」と心の中で訴えかけながら、教頭のデコから頬にかけて汗が弧を描きながら流れるのを見届けていると、咳払いと共に教頭がしゃべりだした。

「早河、正直に言ってみろ。お前がやったんやろ？先生は別にな、怒っちよるわけや  
ないんぞ。ただ真実を話してもらいたいだけなほっちゃ。」

「知りません。僕じゃありません。」

この件はもう三回目だ。<sup>くだり</sup>

少し前に、無賃乗車に間違えられた件で今頃になって問題になっている様だ。『無賃乗車撲滅強化月間』だった手前、犯人を捕まえな  
いと面目丸つぶれって訳だ。

そんな出口の見えないやりとりをしていると、突然ノックもせず

職員室に誰か入ってくるのがわかった。

「陣<sup>ジン</sup>！大変っちゃ！モッサが拉致られた！」

「た、橘君<sup>タチバナ</sup>！なんで君がここにおるんか！」

教頭は間髪を入れずに、学園始まって以来の天才児に対し敬意を払い、君付けして怒鳴った。

「拉致られたって、あんな図体のやつが誰に？」

「トップブラザー。」

俺の質問に待っていたかのようにタチバナが答えた。

「トップブラザーって、お前ら！あんな危ない連中と関わるなっ！」

教頭が言つのも無理もない。トップブラザーとは、山口県で一番有名な暴走族で、良い噂なんか聞いたことない。

「まあ、とにかく行こうや！詳しい話は後でする！」

タチバナのその言葉を信じて立ち上がった瞬間、教頭が俺のカッターシャツの袖を掴みながら「まだ話は終わってないやろうが。」とすごい剣幕で俺を睨んだ。

俺は心を落ち着かせて、教頭の頭を指差し「あ、抜け毛。」とだけ言った。

すると、教頭は袖を握っていた手を離し、即座に自分の後頭部を撫でながら「え、どこ？」と俺に真顔で訪ねてきた。

俺は、ハゲ散らかしているにも関わらず、抜け毛を気にして育毛剤を使っている事は以前から知っていた。手が服の裾から離れるのを見届けると、すぐに俺とタチバナは職員室を飛び出した。

廊下を走り出して間もなく、頭に血が上った教頭と、空気を読んで飛び出して来た体育教師が追いかけてきた。

後ろに気をとられていたら突然、仁王立ちになって行く手をふさぐ担任の野田清道<sup>ノダ キヨミチ</sup>が視界に飛び込んできた。

後ろからは、血眼になって追いかけてくる教頭と体育教師。俺たちに逃げ場はなくなった。「もう、駄目だ！」そう思った瞬間、肩の力が抜けて走る速度も徐々に失速し始めた。

「早河！橘！廊下は走るなって小学校の時に習わんやったか！？」

「先生！それどころじゃないそつちゃ！モツサが、いや中村が拉致られてっ！とにかく大変なんよ！」

俺は、この数秒で理解してもらえとは思わなかったが、とにかく必死にしゃべった。

「そうか、なら行け！仲間はブチ大事にせんにやいけんけえの！ここは任せて、早く行け！」

「え？」

「聞こえんのか！早く、中村<sup>ナカムラ</sup>を助けに行って来いって言いよんじゃ！」

「は、はい!!」

あの説明で味方になってくれた野田<sup>ノダ</sup>先生の理解力の良さと不器用すぎる優しさに、少しビビりながらも、声を合わせて返事をした。

「うちの担任は日本一男気がある人」と、心の中で叫びながら。

俺たちは、野田<sup>ノダ</sup>の横をお辞儀をしながら通過し、下駄箱を通り抜けて玄関から堂々と外に出て行った。

タチバナの話では、昨日ユーズボールでモッサとはぐれてしまい、一晩中探したが見つからなかったと言う。

そして、今朝になってモッサの携帯を使ってトップブラザーのメンバーから電話があったと言う。内容は、モッサの命と引き換えに俺たちが拾った現金を渡せとの事だった。取引場所は宇部港の第三倉庫付近。

「つつか、何で俺らが現金拾ったこと知っちゃん？」

俺は、タチバナに問いかけても答えは返ってこないのはわかっていた。

「知るか！そんなん、オレの方が知りたいわ。」

でも、誰にこの気持ちを伝えればいいのか分からなくて、つい質問してしまった。

宇部港付近まで来ると、いかにもこの辺りで裏取引が頻繁に行われ

ているかのような景色だった。

映画のセットみたいにな気味に立ち並ぶ倉庫は、大きな扉に数字が書いてあった。「03」と書かれた倉庫の前に来ると、無数のカスタムされたバイクが至るところに置いてある。そのバイクの一つ一つにトップブラザーのエンブレムが刻まれている。

「ここで間違いないみたいやお。」

タチバナは、俺の横でボソツと口にした。

俺は「そうやお。」と言いながら、大きな扉の右下にあるドアの前に立った。そして、ゆっくりとドアノブを回すと「キュー」と鳴りながら扉が開かれた。

### 第13話 伝説の不良

中は薄暗く、倉庫にしてはたいしてものは入っておらず、テニスコート分くらいのスペースがあった。

そこには、20人くらいの白い特攻服を着た柄の悪い兄ちゃん達が居て、一斉にこっちを見た。

「あ、クソ。このドアの音のせいで気づかれたあや！」

「コラ、そこ。物のせいにしない。」

タチバナは冷静にツツコミを入れた。

奥の方から総長らしき大男がバットを右手に持ち、ゆっくりと前に出てきた。

「おう、金を持ってきた様には見えんけど、二人だけで何しに来た？」

そう、タチバナに考えがあるらしく俺たちはアタツシケースを持ってきていなかった。

「オレ達も馬鹿じゃないけえの。はい、そうですかってお前らの言う通りにするわけにはいかんや。どうせ、持ってきたところで真つ当な取引なんてできん。金は、ある場所に隠してきた。お前らが取引に応じるんやったらその場所を教えちやる。」

「おおお！」

俺は、感動して思わず声を出してしまった。

「んで、どんな取引なん？」

総長らしき大男は、動揺するのでもなく淡々と質問した。

「オレ達の質問にいくつか答えてもらって、モッサを返してもら  
う。」

と、タチバナが続けると総長らしき大男は眉間にしわを寄せながら  
言った。

「なんか面倒くせえ……。おい、お前ら。コイツら半殺しにして金の  
ありが聞きだせ！」

その言葉を合図に血の気の多い連中が「おおおつ。」と言いな  
がらゆつくりと俺たちの所まで歩き始めた。

「こ、こつちにはのお。御子<sup>ミコシバ</sup>柴さんが付いちよるんやけえのー！」

それを聞いたタチバナがすかさず俺の頭を平手打ちした。

「馬鹿っ！存在もせん人の名前なんか出しても、何の脅しにもなら  
んやろうが！」

タチバナの言う通りだ。

「とっさに出てしまったんじゃ、ボケっ！」



と、見苦しい反論をするしかなかった。

すると、トップブラザー達はざわつき始めた。そして、スキンヘッドの男が総長らしき大男のところまで行き、囁くように言った。

「<sup>ミッソバ</sup>御子柴さんってあの伝説の不良ですよ？不味くないですか？」

それを聞いた総長らしき大男は、生唾を飲み込むと困惑した表情をみせながら俺たちに叫んだ。

「<sup>ミッソバ</sup>御子柴さんと知り合いとは、お前らもなかなかの器うちゅうことやの！わかった、質問には答えちやる。」

その意外すぎる反応に、タチバナと俺は開いた口がふさがらなかつた。

「すげえ…。オーレ達の嘘ってここまで大きくなっちゃ…。」

タチバナはそう言った後、気持ちを落ち着かせるように胸に手を当てた。そして、ゆっくりと口を開いた。

「まず…モッサは生きちやるんか？」

総長らしき大男は不敵な笑みを浮かべながら、後ろの方を指差した。そこには傷だらけのモッサが、紐に縛られて申し訳なさそうにこつちを見ていた。その姿を見た途端、俺は少し安心した。

タチバナはモッサの無事を確認すると、落ち着いて質問を続けた。

「次に、何でお前らが金の事を知っちゃるんか？あれは、オレ達しか知らんはずやろ…。」

その質問には俺が答えると言わんばかりに、さっきのスキンヘッドの男が俺たちの方に向かって歩きながらしゃべりだした。

「はじめまして。私は河嶋カワシマと申します。ちなみに、このチームの総長はあなた達がさきほどからしゃべっている近藤コシドウと申します。以後お見知りおきを。」

河嶋カワシマのたち振る舞いは暴走族でありながら、どこか気品を感じさせた。

「おっと、さきほどの質問に答えなければなりませんね。我々は、言うまでもなくトップブラザーという暴走族です。我々がこの地でそのび羽を伸ばせるのは松園組の恩恵を受けているからでして。その松園組のお金が盗まれたとあっては、我々は黙って見過ごす訳にはいきません。」

あくまで丁寧にしやべろうとする河嶋カワシマにしぶれを切らしたのか、タチバナが話を割った。

「要するに、松園組への恩返しのためにモッサを拉致って金を取り戻そうって訳か？」

あの大金が松園組のものだとすると、やはりマスターはこの事件に絡んでいるに違いない。  
話に割り込まれたことには何も動揺することなく河嶋カワシマは続けた。

「ええ、その通りです。あなたはやはり頭が切れますね、橘氏。でも、あなたの質問は『どうしてあなた達がお金を持っているのを知っているのか？』でしたね。」

その回りくどい質問にタチバナは「うん。」と答えると、河嶋カワシマの言葉を待った。

「実は、松園組の中で内部抗争がありまして、その主犯格がこの宇部に逃げ込んだという情報が先日、我々の耳に入ってきたのです。そして、松園組と我々の総力を結集し、血眼になって搜索した結果、見事に主犯格の男を確保しました。彼が組から奪ったお金をあなた達が持っているという事実にとどり着くには、さほど時間はかかりませんでした。」

「発信器ってことか？」

河嶋カワシマは右手の人差し指を自分の口の前で左右に揺らし「チツチツチ。」と口を鳴らした。どうやら、少しナルシストらしい。

「残念ながら発信器は使っておりません。第一、彼らがどんなカバンにお金を詰めていたのかもわからないので、付けようがありません。単刀直入に言いますと、我々があなた達を見つけたのではなく、あなた達の方が我々を見つけたのです。」

河嶋カワシマの上からしゃべるスタイルに、俺はイライラしてきた。だが、ここで暴れても勝ち目はなさそうなので大人しくすることにした。そんな俺の気持ちを知ってか知らずか河嶋カワシマは俺にしゃべりかけてきた。

「早河氏、あなた以前スラツと背の高いスーツ姿の男と会っていませんか？」

俺はすぐにソレがマスターの店で会った、ピッチリスーツの男で

ある事を言っているんだと気づいた。

「お、おお……。しゃべってはねえけど、会った事はあるぞ。それがどうしたんか？」

「その人は松園組の幹部の一人です。あなた達がマスターと呼ぶ方の所へ彼が訪れた時に、深刻そうな話をしていたのを見たと言言して下さった。おそらく、あなたにお金のありかを伝えたか、何らかの情報のやり取りをしたのではないかと、私は仮説を立てました。そして、あなた達を誘い出すために、少し幼稚ではありますがチェーンメールを回したのです。人間は自分に不利益な事が降りかかる犯人探しをする生き物ですからね。あなた達は当然、メールの発信者を探します。飛んで火に居る夏の虫とはこの事でしよう。へへっ、まんまと自らがお金を持っていると言っていました。我々は一度たりともあなた達が持っているなんて言うていません。」

確かに俺たちは、勝手にお金の事がバレたと勘違いして、自ら名乗り出ってしまった。だが、マスターはお金のありかを伝えたのではなく、むしろ俺達に迷惑をかけまいと何も告げずに失踪した。そのきっかけを作ったのはピッチリスーツの男だ。

「ところで、ピッチリスーツの男はマスターに何を言ったんか？」

俺の質問に河嶋<sup>カワシマ</sup>は快く答えた。

「あなたの舎弟を拉致したと言ったそうです。マスターは『もう足を洗った世界の弟分なので、俺には関係ない』と返したそうです。」

でも、マスターの事だから、舎弟の人の為に自分の今の地位を投げ出して助けに行きかねない。あの人はそう言う人だ。

「おい、早河とか言う奴よ。お前のお人好しぶりにはヘドが出るんじゃない！このデブでしか取り柄のない駄目男といい、ヤクザかぶれのボロい店のマスターといい平和的にすべてがうまく行くと思うなよ。マスターに関しては、松園組がしんどくなつてシッポ巻いて逃げたつて聞いたぞ！お前の周りはゴミだらけじゃの〜。」

近藤は話ばかりするのに飽きたのか、挑発するようにゆつくりとジエスチャーを加えながら言った。タチバナは「挑発に乗るな。」と言ってきたが、俺だって暴力で解決するっていうのは、最近はどうかと思い始めたけど、自分の大切な人を馬鹿にされて見てみぬふりをするような人間にはなりたくなかった。

「モツサ！タチバナ！わりい、俺と一緒に戦死してくれ！」

俺の言葉に、初めは驚いていたモツサもタチバナも、全てを理解したように深く頷いた。

「早河氏、それがどういう意味なのか知つての発言ですか？5000万程度のために命まで捨てるなんて馬鹿げていますよ。」

河嶋は俺を宥めるように言った。

「うるせえっちゃ。お前、さつきから理屈っぽいんじゃない！」

さつきまで冷静だったタチバナは、珍しく感情を表にして叫んだ。その悪口は、理屈っぽいタチバナが言つてはいけないと思うが、それに触発されて俺も叫んだ。

「金のためじゃねえわ！モツサとマスターの誇りのためじゃ！」

その時、  
「キュー〜」とドアノブを回す音が聞こえた。

## 第14話 男ってヤツは…

扉が開いた瞬間、一<sup>ハジメ</sup>に場所と事情をメールしておいた事を思い出した。

俺は、一<sup>ハジメ</sup>が来てくれたんだと思い振り向くと、そこには一<sup>ハジメ</sup>と至る所に包帯を巻いて松葉づえをついた『背の高いおっさん』がいた。

「お前ら、もうそこまでや。」

『背の高いおっさん』は大声で叫んだ。周りの様子を見ると、どうやらここにいる人間は見えているし、聞こえているようだ。タチバナも『背の高いおっさん』が見えているらしく、確かめるように早い口調でしゃべり出した。

「は？どういう事？一<sup>ハジメ</sup>、もしかしてオレにも幽霊が見えるようになったんか？」

一<sup>ハジメ</sup>は、「いいや、違う。この人は幽霊じゃない。」と口にする、俺たちの方まで近寄って来た。

「詳しくは、後で説明する。それより、もうこの件は解決したんよ。」

「…どういうことじゃ！」

先に声を荒げたのは総長の近藤<sup>コンドウ</sup>だった。自分の知らないところで事が終わっているなんて俺だって腹が立つ。その返事には、松葉づえをついた『背の高いおっさん』が答えた。

「兄貴が組に戻った…。それでこの問題は終わったうちゅうことや。」

兄貴とはマスターの事を言っているのだろう。『背の高いおっさん』が何でみんなに見えているのかは後で<sup>ハジメ</sup>に聞くとして、問題は解決したとはどういう事なのか聞こうと口を開けた瞬間、<sup>コソドウ</sup>近藤が割り込んできた。

「おい、橋場<sup>ハシバ</sup>さんよ。解決したとはどういう事じゃ！俺たちはそんな連絡、受けちやらんぞ！逃げ出したかと思えばそんなホラ吹きに戻ってきたんか！」

確か、『背の高いおっさん』はコイツらに捕まっていたはず。<sup>コソドウ</sup>近藤が「逃げ出した」と言っていたのと、『背の高いおっさん』が目の前に居る事に誰も驚かないところを見ると、橋場<sup>ハシバ</sup>さんというおっさんは初めから死んでいない事になる。

「俺は確かに、自分の組を裏切って金を奪った。せやけどな、あの金は兄貴がカタギになってせつせと息子との夢のために稼いだ金や。それを組長は、兄貴を組に戻すために圧力をかけて金を引っ張り続けたんや。やのに、兄貴は文句も言わず金を納め続けたんや。そんなん見て耐えられるわけないやんけっ！」

橋場<sup>ハシバ</sup>のおっさんが言い終えると、携帯が鳴り始めた。それに気付いた河嶋<sup>カワシマ</sup>が携帯を出して何やらしゃべり出した。

なぜか河嶋<sup>カワシマ</sup>がしゃべっている間は誰も怒鳴ったり騒いだりせず、下を向いたり服を叩いたりして変な時間が流れた。携帯で誰かがしゃべっているので静かにしようと思うのも分かるが、こんな緊迫した状態の中でそんな気遣いはいらんのではないかと少し思った。



河嶋カワシマは不満そうに携帯を切ると、近藤コンドウの元へ駆け寄り、耳打ちをした。今度は近藤コンドウが不満そうな顔を浮かべると、俺たちに少し小さな声でしゃべった。

「確かに、解決したみたいやの。あゝあ、全然おもんない。」

そう言うと、近藤コンドウは「帰るぞ」と言い放ち、仲間を連れて倉庫の出口に向かい始めた。

腹の虫が治まらないのか俺たちの横を通る時に、1人づつ舌打ちをしながら出て行った。

俺は、何が何だか分からずにしばらくその光景を見ていた。タチバナは即座にモッサの元に駆け寄り、縄をほどいた。

そして、俺たちは倉庫の出口まで行き、地べたに腰かけた。橋場ハシバのおっさんがブロックの上に座ると、タチバナが俺たちを代表して質問した。

「んで、一ハジメ。この橋場さんハシバ？やったかいな。この人が何でオレ達にも見えて、それで嵐の様にこの事件が解決したんか聞かせてもらおうか？」

一ハジメは、「んゝ、何からしゃべってええんかわからん…」と言いな

がら  
困った顔をした。すると、橋場ハシバのおっさんがしゃべり出した。

「まあ早い話、俺は死んでない。死にかけとったのは確かやけどな。

「まあ、見るからに死んではなさそうやね。見間違いかもね。あ、それとみんな助けてくれてありがとう。」

さつきまで、一言もしやべらなかつたモツサが急に口を開いた。俺たちは「まずお礼が先やろうつ」と全員で一斉にツッコんだ。少し場が和んだのを見計らって、一がゆっくり口を開いた。

「ここにおける『背の高いおっさん』こと橋場さんが松園組内であつた抗争の主犯格つてことも、何で組を裏切つたのかはみんなも分かつたよね。」

俺たちが「うん。」と返事をするのを確認すると、一は続けた。

「トップブラザーが山口に逃げてきた橋場さんを拉致つて袋叩きにした後、マスターがこっそり助けてくれたみたい。」

「そ、それで肝心のマスターはどこ行つたん？さつき、橋場さんが『組に戻つた』って言いよつたけど、どう言うことなん？」

俺は待ち切れずに口を挟んでしまった。

「どう言う事つて言われても、そのまんまの意味や。陣君達と俺に今後、手を出さないと言う条件で兄貴は組に帰つた。兄貴は組長の息子で、行く行くは組を継いでいく人や…。ほんま、俺はいつもあの人に助けられてばかりや…。」

橋場さんは悔しさを押し殺すように右手で握りこぶしを作り、続けた。

「陣君<sup>ジン</sup>…。すまん、許してくれ。俺が余計な事せえへんかったらこんな事には…。」

「俺に謝られても困る。まあ、大阪に行けば会えるんやろ？」

俺は、辛気臭くしゃべる橋場<sup>ハシバ</sup>さんに明るく返した。

「いいや、君らとは住む世界が違うんや。今までみたいには会われへんやろ。陣君<sup>ジン</sup>…。男つてもんは不器用にしか生きられへんのやろうな。愛する人の子供の為にカタギになって、どんなに死に物狂いで働いても、自分の父親がヤクザと知ればその子供の人生を狂わせてしまうと思ったんやろうな。その子が物心つく頃には他人のフリをして暮らしたんや。子供を一番近く見守れる場所で…」

橋場<sup>ハシバ</sup>さんの目が俺に何かを訴えるように見えた。俺は、なぜかその訴えの意味を感じ取っていた。

「嘘じゃ！マスターが俺の父親なんて！」

俺は、気づけば橋場<sup>ハシバ</sup>さんの胸倉を掴んで叫んでいた。橋場<sup>ハシバ</sup>さんは冷静に「ホンマや」と呟いた。俺は、沢山の急な出来事に何も考えられなくなった。橋場<sup>ハシバ</sup>さんは優しく俺の手を払うと遠い目をして呟いた。

「…兄貴はただ、普通に人を愛して、その人との子供を普通の父親として生きたかったんやな。俺たちの世界じゃ、そんなもん許されるわけあらへん。ヤクザもんはヤクザもんとでしか生きられへんちゆう事や。」

今まで父親代わりだと思っていたマスターは実の父親だった。この事は<sup>レイ</sup>怜は当然ながら知っていたのだろう。俺は、今まで秘密にされていた事よりも、自分が父親だと言う事を実の息子に言えない親心の方が気になってしょうがなかった。

いくら将来的にマスターが俺の親である事に負い目を感じても、それでも真実を話してほしかった。

一度でいいから父親として接してほしかった…

## 第15話 Shuwa cchi!

「え？幽体離脱？」

モツサの馬鹿でかい声は店じゅうに響きわたった。

モツサの拉致事件から数日が過ぎ、暑さも冗談ですまなくなってきた今日。

一が急に俺たちをマスターズカフェに呼び出した。なぜか今は、マスターに変わって『背の高いおっさん』こと橋場<sup>ハシバ</sup>さんがお店を切り盛りしている。

一<sup>ハジメ</sup>の説明に首を傾げるモツサと俺に対して、タチバナは「猿でもわかるようにオーレが説明しちやる」と皮肉を交えながら言うものだから、俺は少し太ましい顔でタチバナの話を聞いた。

「つまり、『背の高いおっさん』はトップブラザーに袋叩きに合った後、命からがら大金の入ったアタッシュケースを持ち出したって事。それで、岩鼻駅近くの草むらにアタッシュケースをとりあえず隠し、身を隠そうとするが力尽きて倒れてしまう。そのまま意識不明のまま病院に運ばれたんやけど、魂だけが体を抜け出して岩鼻駅<sup>ハジメ</sup>に行った。一とお前は、その『背の高いおっさん』を見つけたって事。」

「なんでもええけど、その『背の高いおっさん』っちゅうのはやめてくれへんかな？」

せっかくタチバナが気持ちよく話していたのにも関わらず、橋場<sup>ハシバ</sup>さんは割りこんできた。

「：「すみません。ところで橋場<sup>ハシバ</sup>さんは、自分の魂が抜けて出た時の記憶ってあるんですか？」

タチバナは、叱られついでに質問した。橋場<sup>ハシバ</sup>さんは突然の質問に、少し動揺しながら斜め上を見て、記憶を辿る様にしゃべる。

「んー、そうやなあ。ベットに寝とる自分を天井から見下ろした事ははっきり覚えてんねん。そんで、陣<sup>ジン</sup>君達を草むらの中から見付けた事も覚えてんねんけど、所々の記憶しかないねん。」

橋場<sup>ハシバ</sup>さんがしゃべり終えるのを見届けた後、タチバナは何度も頷きながら続けた。

「今の橋場<sup>ハシバ</sup>さんの証言ではっきりしたな。一<sup>ハジメ</sup>は霊を見たんじゃないくて、生霊を見たって事。んー、認めたくはないけど、幽霊が見えるって言われるよりは信憑性がある。それに、一<sup>ハジメ</sup>の歌声と生霊は関係していないって事か。」

最後のタチバナの言葉が理解できなかった俺は「歌声と生霊は関係していないってどういう事なん？」と間髪を入れずに質問した。

「お、良い質問だ。」

なんだかタチバナが生意気に見えた。そんな事はお構いなしにタチバナは淡々と話を続けた。

「巷<sup>ハジメ</sup>で一<sup>ハジメ</sup>の能力は、歌を唄う事で発揮されるとされちゃうやろ？今回の件はその歌を唄っていないやん。オレの見解は、生霊などは歌声がなくても見れるっちゅう事やないやろうか？」

「タチバナちゃん、幽霊とか信じてない割には深読みするんやね。」

モツサは、胸にグサリと刺さるようなツツコミを入れた。

「うるせえ！信じてねえ事には変わりねえっちゃ！まあ、とにかくオレが何が言いたいんかと言うと……」

タチバナは、もったいぶる様に氷水を飲み干して、俺の方を向きながらゆっくりしゃべる。

「美空<sup>ミソラ</sup>って言ったっけ？今考えれば、お前はあの子も一の歌声<sup>ハジメ</sup>とは関係ない所で出会っちょう……。もしかしたら……」

「タチバナっ！もう止めようや！せつかく陣<sup>ジン</sup>も忘れかけちょうのに……」

とつさに一<sup>ハジメ</sup>がタチバナを止めた。タチバナもふと我に返り「あ、ごめん。」と言いながら、ずれた黒ぶち眼鏡の位置を元に戻した。そして、あたかも重くなった空気を払拭するようにタチバナの口が動く。

「ところでさ、例の大金ってどうなったん？」

「あれさ、怜<sup>レイ</sup>が半分はボランティア団体寄付して、もう半分は老後の貯えにするって言いよた……。なんか、期待持たしてごめんな。」

あまりにも俺の返しが真面目だったのでタチバナは何も返す言葉が見つからない様だった。

「タチバナには珍しく今日は目、裏目に出るね。」と励ますように

囁く<sup>ハジメ</sup>一の言葉はどうやら届いていない様だった。

もし、さつきタチバナの言っていた事が本当なら、美空<sup>ミソラ</sup>はこの世界のどこかで生きているかもしれない。俺は、そんな小さな希望が生まれた事だけで少し嬉しくなった。

そして、みんなそれぞれ用事があるとかでマスターズカフェを出て行った。店の中には、橋場<sup>ハシバ</sup>さんと俺だけになった。

「ははっ。何やあいつら、気を使って陣君<sup>ジン</sup>を1人にしてやろうと思ったんやろうな。」

この人こそ、俺に気を使って愛想笑いなんかしながらしゃべっている。

一時して、橋場<sup>ハシバ</sup>さんは意を決したように俺に話しかけてきた。

「突然やねんけどな、陣君<sup>ジン</sup>に見てもらいたいもんがあんねん。今朝、この店を掃除しとつたらな、こんなもん見つけてん。」

そう言うと、カウンターの下から古めかしいノートを取り出し、俺の目の前に置いた。よく見るとノートには汚い字で『ダイアリー』と書かれてあった。俺は、さっそくそのノートを読み始めた。

『1984年8月29日、晴れ。クソ暑い夏。夕日が落ちる頃に俺は息子を授かった。陣<sup>ジン</sup>と名付けることは前から決めていた。ずいぶん、世間から褒められるような事をしていない俺でも、この子の目を見るだけで頬が緩む。この子の笑顔を見るためなら何にでもなれる気がしてきた。』



1987年4月20日、曇り。今日は親子水入らずで映画を観に行った。陣<sup>ジン</sup>は幼いなりに「イノセントマン」というヒーローに憧れたのだらう。帰りに買ってやった「イノセントマン」のぬいぐるみを肌身離さず持っている。

1987年8月29日、晴れ。俺は苦渋の決断を迫られた。極道の道を誇りに思っている俺が父親だと陣<sup>ジン</sup>の明るい未来に影響してしまう。この子には自由な人生を選ぶ権利がある。だから、父親をやめる事にした。せめて、陣<sup>ジン</sup>が18くらいになるまでそばで見守りたい。

2000年4月15日、晴れ。陣<sup>ジン</sup>が学校で大喧嘩をして見事に負けて帰って来た。父親として何かしてあげればいいのだが……」

そこには、正直なマスターの気持ちが綴られていた。

そして、3歳の頃からイノセントマンというヒーローに憧れていた事に少し驚いた。でも今思えば、イノセントマンにただ憧れていたのではなく、幼いながらもヒーローに父親を重ねていたのかもしれない。

そして、日記の最後のページにも何か書かれていた。

「陣<sup>ジン</sup>、喧嘩はタイムマンならいくらでもしろ。本気で殴りあって初めて相手の痛みがわかるからだ。ただ、自分より力の弱い者や、大切な人には心から優しくしろ。」

これから先、出会いもあれば別れもある。大切な人をなくして改めてその人との日々を愛しく想える。

人生に疲れる事や、心から人を憎む事もあるだらう。でも人を嫌いにほどお前は人に出会っていないし、まだ歩き疲れるほど生きてない。

まっすぐ生きろ。お前は俺の誇りだ。お前の未来は無限に広がって

いる。  
☐

## 第16話 魔女とオヤビン

いつの間にか木々は紅色に染まり、北風が背筋から寒さを伝える季節になった。

本校も冬服に変わる時期で、この1週間は準備期間としてどちらを着てもいい事になっていた。

こういう時は、目立ちたいのかよくわからないが、学ランの下に半袖のシャツを着て来るお調子者がいる。

<sup>ハジメ</sup>  
—もその1人だ。

彼の言い分には「朝は寒いし、昼は暑いやん。」らしいが、確かに一利ある気がする。

そんなくだらないやり取りを<sup>ハジメ</sup>一としながら帰っていると、懐かしい人と出会った。

「オヤビンじゃあ。」

先に気づいたのは<sup>ハジメ</sup>一だった。オヤビンは顔を蛭子さまの様にくしやつとして笑った。

俺が高校に入る前くらいまで、オヤビンは俺の住む市営住宅の隣の平屋に住んでいた。手先が器用で、昔から俺と<sup>ハジメ</sup>一を家に招いては手品やギターを弾いてくれた。

歳はふたまわりくらい離れているが、とっても優しく俺たちが生まれて初めて憧れを抱いた人物だった。ギターを始めるきっかけ

になったのもこの人の影響だ。

俺たちが小学6年くらいにオヤビンは町田のばあちゃんと一緒に住んでいた。ばあちゃんと呼んでいたが、オヤビンの母親だ。

町田のばあちゃんは、近所の人達から『町田の魔女』と呼ばれていた。

名前の由来は、毎日のように近くの山へ行っては山に生えているキノコや雑草などを籠一杯に持ち帰って来るところから皮肉を込めてそう呼んでいた。

町田のばあちゃんは、週に三回くらいはウチに来ては、大好きなお酒を飲んで歌っていた。

「アーリラン、アーリラン」といつも同じ歌を口ずさんでは、帰りにになると涙を流すのが恒例だった。

「お国に帰りたいの……。でも、息子はココ（日本）が故郷やけ帰るに帰れんわい。」

そう、彼女は朝鮮人だった。

戦後の高度成長期に国から無理やり連れてこられ、日本のために働いた。今の日本を作り上げたのは言わばこの人たちのお陰だと言っても過言ではない。

だが、世間は日本人じゃないと言うだけで下に見てしまい、嫌がらせもいろいろ受けて来たと言う。でも、怜<sup>レイ</sup>は「どこで生まれてようが、どこで生きようが、馬が合えばみんな友達やろ。」と呑気な事を言っただけでも付き合える。

そんな誇らしい母親に育ててもらったお陰で、偏見という名のフィルターを着けずに本質を見通せる目を持つことが出来た事を感謝している。

町田のばあちゃんは道端で会つと決まって同じ事を聞いてくる。

「陣<sup>ジン</sup>や、ばあちゃんの事、好きか？」

俺は迷わず「うん」と返す。すると、ばあちゃんは、がま口の財布から五百円を取り出してくしゃつと微笑みながら俺の掌にソレを置く。そして「ジューズでも買っておいで。」と囁くと、笑顔のままその場を立ち去る。

今考えると、俺たちから嫌われるのが心のどこかで怖くて、口に出して愛を確かめたかったんだろ。俺は、そんなことしなくてもばあちゃんもオヤビンも大好きだった。

でも、何もわかっていなかった当時の俺は、「好きか」聞かれて「うん」としか言えてなかったんだ。

ある日の夕方、ばあちゃん家で遊んでいる時に昔の話を聞かせてくれた。

「ばあちゃんね、たけしの夢を奪ったんよ。」

たけしとはオヤビンの事で、ばあちゃんは大粒の涙を浮かべてしゃべりだした。

「あの子はね、真面目でぶち元気な子供やったんよ。小学生の頃か

らかね、皆勤賞を取るのが夢でね。どんなに熱だした日でも倒れそうになりながら学校に行ったんよ。」

オヤビンの昔話を聞くのは初めてだったので、プラモデルそっちのけで聞き入っていた。

「あれは、忘れもせんね、小学6年の時に、遠足があったんよ…。でもね、ばあちゃんの家にはお金がなくてね…。握り飯も作れんね…。たけしは生まれて初めて学校を休んだんよ…」

当時の俺には、ばあちゃんにかけ言葉なんて見つかるわけもなく、泣きじゃくる彼女を見つめる事しか出来なかった。

そして、中学2年生になったくらいから、俺と一ハジメは新しく出来た友達と遊んだり、はじめたてのギターの練習だなんだで町田のばあちゃんの家には行かなくなっていた。

風の噂で、ばあちゃんが入院したことだけは知っていたが、お見舞いにも行かなかった。

そして、ある夏の暑い日。棺桶がばあちゃんの家<sup>ハジメ</sup>に運ばれて行くのを見た。

急いではあちゃん家に行くと、オヤビンの啜り泣く声が聞こえた。棺桶の中を見ると、白髪の老婆が静かに目を閉じたまま眠っていた。俺はこの時、生まれて初めて人の『死』と言うものに出会った。

夏にも関わらずひんやりと冷たい室内は今まで遊びに来ていたばあちゃんの家とはまるで違った。あまりにも突然の出来事に、俺の頭

の中は真っ白になっていて何一つ喋ることも、悲しい表情を作ることも出来なかった事をよく覚えている。

俺たちはオヤビンとの再会を懐かしみながら、駅前にあるセンチツのベンチに腰掛けた。

オヤビンはデパートや遊園地などで手品などをしながら生計を立てていると言っていた。自分の好きなことを仕事に出来るなんて素敵な事だと思った。

ふとした事から「何か唄ってえや。」とオヤビンからリクエストが入った。俺たちは、師匠の前で唄うとかと思うと何だか照れ臭くなった。

「アカペラなら『心の花火』がええね。」

と、隣の肌ツルツル男は自分のオリジナルを候補に上げるほどの気満々だった。

俺たちはアカペラではあるが、オヤビンの前で唄を歌った。

この曲はアップテンポなので「アカペラでうまくいくか？」と初めは思ったが、案外シツクリきた。

一番を歌い終える頃に、オヤビンとは別の視線を感じた。姿を見なくてもそれが町田のばあちゃんだとわかった。

ばあちゃんは目を閉じて、俺たちの唄を聞き入るように静かに佇んでいた。

歌い終わると、オヤビンとばあちゃんは大きな拍手をしてくれた。

「ええわあや。早よ、デビューせえや。はははっ。」

ハジメ  
「もばあちゃんの姿に気が付いた様だった。」

「ばあちゃん…。」

ハジメ  
「一言で、オヤビンの拍手がピタリと止まった。オヤビンは一ハジメ  
の能力に初めて気づいた人で、一番の理解者でもある。だから、今の一言ではあちゃんがそばに居ることを悟ってしまったのだろっ。」

突然、ダムが決壊した様に大粒の涙がオヤビンの頬を伝って流れた。

「お袋…。親不孝ものですまんかったな…。」

オヤビンは、見えないばあちゃんに向けてボソッと一言だけ告げた。

ばあちゃんは穏やかな眼差しでオヤビンを見つめ、ゆっくりと2回、横に首を振った。そして、触れる事の出来ない我が子を何度も抱きしめようとした。

しばらくして、ばあちゃんは俺の方に近づくと、あの頃と同じ口調でに俺に聞いてきた。

ジン  
「陣や、ばあちゃんの事、好きか？」

俺は迷わず「うん…、ブチ好き」と返した。

その言葉は、あの時言えなかった「ありがとう」「や」「愛してる」「や



「さよなら」でもあった。

ばあちゃんはシワだらけの顔をくしゃつとして蛭子さまの様に微笑んだ。

そして、そのままゆっくりと見えなくなった。

## 第16話 魔女とオヤビン（後書き）

忙しい中、読んで頂いてありがとうございます。

「こんな時に…」と思いましたが、何もせずにいられず心を込めて綴りました。

この作品が少しでも読んで頂いた方の心に残れば幸いです。

いよいよ最終章です。

お時間がある方はお付き合いください。

なお、この作品は予告なく変更、追加する事がありますので、ご了承ください。

for Taichi Matsubara

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5383o/>

---

シュワッチ！ Shuwacchi！ -

2011年9月8日03時15分発行